

日本國語大辭典

第二卷

編集 日本大辭典刊行會
發行 小學館

日本國語大辭典

第二卷

編集 日本大辭典刊行会
発行 小学館

日本国語大辞典〔縮刷版〕 第二卷

昭和四十八年 五月一日 日本国語大辞典 第三卷発行◎
昭和四十八年 七月一日 日本国語大辞典 第四卷発行◎
昭和五十四年十二月二十日 同 縮刷版第一版第一刷発行◎

編集 日本大辞典刊行会

発行者 相賀徹夫

印刷者 小林清

発行所 株式会社 小 学 館

東京都千代田区一ツ橋二一三一一

電話 製作(二三〇)五三三三
販売(二三〇)五七三九

〔郵便番号〕一〇一〔振替〕東京八一二〇〇

* 造本には注意しておりますが、万一落丁・乱丁
などの不良品の場合は、おとりかえいたします。

Printed in Japan

0581-420002-3068

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、
法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利侵害
となります。あらかじめ小社あて許諾を求めてください。

向を指す者の集まり。保守派：左派。(関園繪之)
 は〔姥・祖母・乳母〕(名)①(姥)年老いた女。老婆、
 嫗おうな。千種本佳吉「うばがあににかぞへのかみと申するもの候ふ。七十にあたり候ふおきな」の
 太平記二五自伊勢進宝剣事「此姫は老翁おきな
 老婆ウバ」が儲まうけたる孤子なり」とりこ也」
 ・浄瑠璃・寿の門松上「高砂の附せう」と姥が離別し
 たやうなりて。太夫さんに摺すりれもつれ」
 (姥)能面の一つ。老女の顔をかたどったもの。「卒都婆小町」説。老女の顔をかたどったもの。卒
 も「接待などのシテ、高砂「嵐山」などのツレに用いる。老人を現わす尉じょうに對するもの。」③(祖母)両親の母親。おおは。ば。宇津保吹上とかれどもおちてうば候ひなり。隆信集「うばにて侍りし人みなかりて、法性寺といふ所に送り置きて月あかりし夜・色業字類抄「祖母ウハ外祖母同如阿母方」。名語記十五父母のはをうばとなづく。如何。御伽草子・唐糸草子などにかくに、うばさまの御命をよくよく惜しませ給ふべし」④(乳母)母親にかわつて子供に乳を与え、その世話をする女。二人まで氏すじやうまでを吟味して」⑤年をとつて老婦織留十六三本乳母ウバ抱撫だきウバと子馬岐草・伊賀・鳥取・広島県・嵯峨・千(秋田・福島・千葉・秋田)ンバヤ(仙台音韻)繪之(余之)園園色業・文明堂・天明正統續編・平林書畫

うばが年代記ねんだいき(年代記では年代がいろいろ大事なのに、老婆の記憶ではあまりにはつきりしないところから、老婆の不正確でよいにならないことゝいこのたとえ。咄本・醒睡笑四「これは何物ぞや」と問ふ時、これぞさうだ。あのおごのうまれ年に、このふくべがなりてあった。うばが年代記にて、いよいよ知れた。物の役に立たなく



姥②<東京国立博物館藏

うばの出番がたり(乳母が暇を取つて去る際「坊はんよ、さらばと挨拶するところから」ほんさらばお盆も今日で終わり)にかけて、それつきり、おさらば、これが最後の意にいたる。＊風流すいきことばうらばの出来は、ほんさらばじゃ

うば【豆腐皮・湯葉】①酒や酢などに醸造するとき、表面にできるあくのようなもの。＊万金産業袋六・酢の造りをうさしたる事し、へ略十日斗はかりもして湯をひらき、上の湯液(うべ)を取て搾かき廻し②豆腐を作るとき、表面の薄皮をとって乾かしたもの。ゆば・本朝食鑑一・二豆腐へ略其釜中浮面凝結如濕紙者豆腐皮也俗稱豆腐襖(うべ・取之晒乾云々) 因園③おもひや粥かぶりの表面などにつける膜のような物。群馬県勢多郡23大原町63 奈良県北葛城郡665 高知県842④水面に油のかうに浮いた油と歌山576 關國(ウハ上)の連濁か〔上方浮語辞典〕前田勇。

うば【名】植物 あぶらぎ(油桐)の異名。重訂本草綱目啓蒙三一・番木 罌子桐 あぶらぎりへ略うば土州 因園⑤牛 伊豆大島90⑥かえる(蛙)。大分県北海部郡97⑦かむらび(烏妻)。志岐島93④うら(海胆) 琉球加計呂麻島94

うば(推量の助動詞「う」に接続助詞「ば」の付いたもの) ①仮定条件を表わす。「あるならば」「なれば」近世前期の用法。狂言記・舟なるこざりまうらばうたはしやれませい。＊歌舞伎・好色伝受上「云ふ事があらうば、こども難じて、心を静めてはいしやれ」＊歌舞伎・一心十回白道二・忤せられめは母を慕ひ頼みく、と有一つ呼ぶことがなりませ、死なば死に次第・淨瑠璃・女殺油地獄中「手がらにむこうばよればふよふで見や」

ウバー【名】(China) ロシア料理の魚のスープ。 因園

うばあいさ【姓】秋沙沙【名】鳥・みこあいさ(巫女秋沙)の異名。本朝食鑑十五小鴨へ略有眼上有黒条翹上交互黒羽者呼号(姫)(鳥)阿伊沙

うばい【鳥梅名】(ウ)は黒い意 半熟の梅の実を煙で黒くいぶしたものを。薬用、また、染料にも用いる。ふべうめうめほし。＊康順本草・本草綱目・中品集下品・梅実 味酸平無毒、和字文 一月採之。火乾烏梅者は諸人入之。＊音維紀文天文 八年閏五月二十五日三歳男子、咽渴利瀉葉之事申、五苓散に加葛根・烏梅二包進之。＊本草綱目・果部・烏梅時珍曰、造法、取青梅・監盛、於突上熏黑 因園

うばい【優婆塞】(名)(Uparika)の音訳。仏語。三宝(さんぼう)に帰依し、五戒を受けた女。漢訳して「近事女(ごんじょ)」とも、「清信女(しょうしん)」ともいう。(優婆塞うらばそく)。純日本紀天平三年八月癸未詔曰。比年隨逐行其法師優婆塞優婆夷等。

うばの出番がたり(乳母が暇を取つて去る際「坊はんよ、さらばと挨拶するところから」ほんさらばお盆も今日で終わりにかけて、それつきり、おさらば、これが最後の意にいたる。＊風流すいきことばうらばの出来は、ほんさらばじゃ)

うば【豆腐皮・湯葉】①酒や酢などに醸造するとき、表面にできるあくのようなもの。＊万金産業袋六・酢の造りをうさしたる事し、へ略十日斗はかりもして湯をひらき、上の湯液(うべ)を取て搾かき廻し②豆腐を作るとき、表面の薄皮をとって乾かしたもの。ゆば・本朝食鑑一・二豆腐へ略其釜中浮面凝結如濕紙者豆腐皮也俗稱豆腐襖(うべ・取之晒乾云々) 因園③おもひや粥かぶりの表面などにつける膜のような物。群馬県勢多郡23大原町63 奈良県北葛城郡665 高知県842④水面に油のかうに浮いた油と歌山576 關國(ウハ上)の連濁か〔上方浮語辞典〕前田勇。

うば【名】植物 あぶらぎ(油桐)の異名。重訂本草綱目啓蒙三一・番木 罌子桐 あぶらぎりへ略うば土州 因園⑤牛 伊豆大島90⑥かえる(蛙)。大分県北海部郡97⑦かむらび(烏妻)。志岐島93④うら(海胆) 琉球加計呂麻島94

うば(推量の助動詞「う」に接続助詞「ば」の付いたもの) ①仮定条件を表わす。「あるならば」「なれば」近世前期の用法。狂言記・舟なるこざりまうらばうたはしやれませい。＊歌舞伎・好色伝受上「云ふ事があらうば、こども難じて、心を静めてはいしやれ」＊歌舞伎・一心十回白道二・忤せられめは母を慕ひ頼みく、と有一つ呼ぶことがなりませ、死なば死に次第・淨瑠璃・女殺油地獄中「手がらにむこうばよればふよふで見や」

ウバー【名】(China) ロシア料理の魚のスープ。 因園

うばあいさ【姓】秋沙沙【名】鳥・みこあいさ(巫女秋沙)の異名。本朝食鑑十五小鴨へ略有眼上有黒条翹上交互黒羽者呼号(姫)(鳥)阿伊沙

うばい【鳥梅名】(ウ)は黒い意 半熟の梅の実を煙で黒くいぶしたものを。薬用、また、染料にも用いる。ふべうめうめほし。＊康順本草・本草綱目・中品集下品・梅実 味酸平無毒、和字文 一月採之。火乾烏梅者は諸人入之。＊音維紀文天文 八年閏五月二十五日三歳男子、咽渴利瀉葉之事申、五苓散に加葛根・烏梅二包進之。＊本草綱目・果部・烏梅時珍曰、造法、取青梅・監盛、於突上熏黑 因園

うばい【優婆塞】(名)(Uparika)の音訳。仏語。三宝(さんぼう)に帰依し、五戒を受けた女。漢訳して「近事女(ごんじょ)」とも、「清信女(しょうしん)」ともいう。(優婆塞うらばそく)。純日本紀天平三年八月癸未詔曰。比年隨逐行其法師優婆塞優婆夷等。

如法修行者。男年六十已上。女年五十五以上。咸
聽入道修（一）靈異記中「一九利」とかりの優婆夷
は、河内の国の人なり。（二）徒然草「一〇六」四部の弟子
はよな比丘（びく）より比丘尼（びくに）は劣り、比
丘尼より優婆塞は劣り、優婆塞より優婆夷は劣れり。（三）
又音（四）義（五）二一「耶波斯迦或云優婆胝迦也」余之（六）
善友言（七）「優婆夷」と詔べし。（八）國語釋名書
ばいはいうひあひる【誓合】（九）「名」物を争つてとりあ
ひあひるをいふ事。山崎闇斎集（一〇）余之（一一）
ばいはいうひあひる【誓合】（一二）「他」互いに
奪ひ取り合うと爭ふ。俳諧・羅漢集（一三）夏目漱石
弱かしたる策かな。吾輩は猫である。夏目漱石
久気狂（一四）（さきがけ）が集合してへ暗いがみひ、罵り
合ひ、奪ひ合つて。園田因ウバイオといとも愈々（一五）
【因】余之（一六）
ばいはいえすうぶしかへす【奪返】（一七）「他」三四「取ら
れたものを取り返す」。古事談二「業平見小野小町
闖腹事。業平朝臣監三糸后宮仕以前ヲ得去之
間、兄弟達ハ昭宣公等ノ迫至奪返之時」、日葡辞書
「Vladimir, est etia u bai ca es」。「浄瑠璃・傾
城反魂香」上「御未印うひひかへすは、長く給師の
取返し也。園田會之因余之（一八）
ばいがい、アッン島梅丸に用ゐる」。延喜式三七・
典藥寮中宮臘月御業々略島梅丸略各一割」。二
十卷本和名抄二「島梅丸治丁腫下痢」
ばいはいうひあひる【奪首】（一九）「他」者の舌を討ち取つて
ばい首を奪ひ取つて自分の功勞とする者。また、
その首。ばいぐつ。武家名目抄「車陣部。奪首初拜
日記云。丹波家七頭七組衆。他國には人のえたる首を
奪首と云をも仕る由に候。園田會之因
ばいさいさるをも仕る由に候。園田會之因
をむりやりに、取つて行つてしまふ。内地雑居未來
之夢坪内逍遙五「ナイフ」と肉文にくまの「皿だけ」は
逆ばかりするゆゑ、情じや、「カテレ」の一皿だけは、
さしこめ味はずって、奪ひやられつゝ「虞美人草」夏目
漱石二「静かなる昼の、遠き世に心を奪うバ。」ひ去
（さら）んとするを。土長塚原一八「頑丈な身体か
ら其の生命を奪ひ去る。」園田會之因
ばいはい【姥母石・姥石】（二〇）「老女がかうづまつてい
るような形の石。また、その石の由来を説明する伝
説。全国一点在るが、栃木県上都賀郡のものは、父
母を失つて乳母に育てられた子が、乳母をたすね歩
きのが見つかつて、空母に教へられてその石に
十六羅漢の像を刻んでもらつて供養したという。
園田會之因
ばいはいと【姥糸】（二一）「寄せあつめただけで、疑ふより）
にかけてなる絹糸。刺繍や、糸縫いとふさぎなどに

用いる。たゞ「烏梅湯」(名)干して、ぶした梅の実を煎じ出した薬湯。はれものや下痢の妙薬として知られる。

ばいりといふ。うばひ(奪取)「他ラ五四」他人の物を無理やりと、自分の物にする。ひったくる。盗みとる。

津律保 藤原の君(うしろし)人。わが国におひづるものにも、劣らぬものかなとてうばひとりてゐていぬ。・源氏「竹河」源侍従の文をぞ見る給へりける。ひきかかすを、さなめりとみて、うばひとりつ。・平家八幡判官「人の倉のうちあけて物とる」、持ちて通る物をうばひとり、衣裳をはぎとる。・滑稽本「浮世風呂」前上「飛車手手をはつたて、銀を奪取りてペロヒ」上の計略だぞ。・明略「夏目漱石七〇」「ただ神籤箱(みくじばこ)を(を)継子(つぎこ)の机の上から奪ウバ(ひ)取(と)りたかつた」突因書之四因

金う 金。

ばうう ばふ(奪)「他ラ五(ハ)四」(平安時代には「ばふ」とも表記された)①他人の所有物を無理やりに取り上げる。奪いとる。②力ずくで人の物を自分所有にする。強奪をも。こどります。・書紀「神代上水戸本訓」謂をもふに当に国を奪ウバ(ひ)むとすの志有ありてか。・靈異記上「九村の童女、井に來りて水を汲まむとして、宿れる家の童女の井つるを」を奪ウバ(ひ)ふ興福寺本訓釈。奪有波不V。・津律保 藤原の君(うば)京わらは、まむばひといふ。・暴夜物語「永祿秀樹記」黒鳥士の伝「日に來りて衣裳を被(う)ぶ裸体(はだか)となして、背に「百の鞭を喰くら」はしめ」③権力によつて、地位、仕事、財産などを取り上げる。剽奪(はくたつ)する。没収する。「官位を奪ウ」(君主を除き、代わつてその地位につ。篡奪(さんだつ)する。・新撰土鏡 篡奪也 逆而奪取曰篡 宇波不。・守護国界主院羅尼經上安中期点一〇「大王の宝位を奪ウバ(ひ)奪ム」は経上の事なり。・親智院本名義抄「篡ウハムバフ位」。・隨筆「胆大小心録」四私が名目と分りて、奪ふて代るを尊位といふ。④ひとから自分の物にする。盗みとる。かすめとる。また、取つて自分の物にしたように見えることにもいふ。・万葉五・八五〇「雪の色を有婆比ウバヒ」て咲ける梅の花今盛なりな見む人むがもも大伴旅人」。・源氏「東屋」我を思ひへたてて、吾人(あ)この御けうし人をうばはむとし給ひける。おほけなく心をさなきこと。・金光明最勝王經音義「掠半(うば)」。・親智院本名義抄「掠カスムトルムハウ」。・徒然草「二三八」紫の朱れたき事ありて。⑤男女関係で(う)肉体をおかした。上海「横光利一」五「おはは昨夜の出来事を思ひ出した。すると、今迄自分を奪つたものは甲かたと思つてゐたのに、急に、自分は参度でもなかつたと思

云)不燃不可為薪。故里俗。婆殺乳母ヨコシト云。
 ②植物。名。こじゅ。珊瑚樹。宅岐島然。③魚。あまぎ。高知市五台山85。
 づばころし(乳母殺)一名。干し菜のあえもの。譬喩。
 乳母の好むへな。
 づばさぎ(姥鷺)一名。鷺の一種とするが未詳。・語彙。
 うばさき。鳥名。青鷺あおさぎの一種小しして全体に淡赤色を帯たものなり。・巨宮浦・田泣菰。
 わがゆく海。姥鷺ウバサギは、さぐむ水沼。
 づばさくら(姥桜乳母桜)一名。①葉が出るのに先だき、花がひらくと桜の通俗的な総称。花がひらくとき、葉巻がひらくことによる名称。といふ(本草)。・ひがんざくら。うばひがな。・季。春。・俳諧。毛吹草。二俳諧四季之詞略。二月。略。彼彼岸うば桜かば桜。・俳諧。佐夜中山集。姥桜さくらや老後の思ひ出にいひて。・芭蕉。②この年増でありながら、なまめかしい人。・淨瑠璃。賀古教信七某朝桜祭文。小町桜もおひねれば、身はもとせのうば桜。・寒山落木。正岡子規。明治。六年春。四十七の年より咲て姥桜。・社会巨匠。内田魯庵。老俗史。三十八の猶。まだだ姥桜ウバサクラの香めてたき母親は嫣然(こやか)かに微笑みつ。③貴人の乳母を理めた傍に植えたなどの伝承をもつ。また、その伝説。広く各地に分布する。・因園植物。④うわすずから上落桜。山梨県東山梨郡03。長崎県南高来郡02。⑤もくれん(木蓮)。若手泉九郎02。姥桜之切。余之切。
 うばさぎ(姥鷺)一名。ウバザザ科のサメ。全長一二メートル。体は紡錘形で肥大し、柔らかな。性質は温和。太平洋、大西洋、寒帯性・外洋に分布し、海面近くを泳ぐ。胎生。肉はむきずうと利用価値は低いが肝臓から油がとれる。みがざめ。うとうざめ。てんぐ。・重訂本草綱目啓蒙。四。・魚。鮫魚。うらうばざめは一名うばぶか大なるものは長さ六七尋尺白色皮に皺あり歯なし。・團圓海がきわめて小さくので、歯無しというところからウバ・姥と名付けたものか(大言海)。
 海。・因園植物。
 うばしぎ(姥鷺)一名。①鳥。おばしぎ(姥鷺)の異名。②鳥。やましぎ(山鷺)の異名。・因園植物。③鳥。植物。うばめが(姥目梅)の異名。・大和本草。二。うばしは。・略。葉の形、茶の葉に似て細なり。・略。海辺の山野に多し。・因園和歌山初うばすてやま(嶺捨山)おばすてやま嶺捨山)に同じ。④名。字間でして独立しなければならぬ。ないような不美人の行く学校というところから女子大学をいう、明治期の学生仲間の隠語。(特殊語百科辞典)。
 百枝辞典)。
 うばしぎ(姥鷺)一名。植物。たがらし(田芥)の異名。・物類称呼。三。石龍芮。たがらし。略。西国にて、うし

奥三浦原（説小針09）
せり又ばそぢ
うばそぢ〔優婆塞〕「名」(ハミダツの音訳) 仏語。①七家の一人。三宝さんぽうに帰依して五戒を受けた男子。漢訳して「清信子(しょうしんじ)」近事男(こんざんなん)ともいう。うばそぢ：優婆夷(うぱい)成宿故。又梵云、鄒波索迦、唐言近事男、謂親近承事諸佛法故、天竺受五八成俗人、稱之亦云清信士」。②在家のままで出家と同じような道修行にはげんでゐる。・宇津保朝（寛）の寛、うばそぢが行ふ山の推しひがもとあなそばそぼしとししあらねば〔優婆塞〕「因」〔園圃期待〕
うばそく〔實〕(みや) 在家のままで、出家と同じような修行をしている親玉、内親玉、女院、入道のの宮。・太平記一五・賀茂神主改補事、優婆塞宮ウウバソコ（ニヤ）のすまひ給ひし跡を追ひしかば、月的前に琵琶を弾じては、古今連談集上「彼光麗尼生経。氏のうばそくの宮の間居は月日にそへて」うばそくかききょうウツクカキヤウ〔優婆塞成経〕大乘經典の一つ。曇無讖(だむにしん)が四二六年に漢訳。大乗仏教の在家信者の守るべき戒律を説く。養正統。

うばそく〔優婆塞〕「名」 仏語。「うばそく優婆塞」に同じ。・承德本古讀集、北御門の御神楽、字者曾古ウウバソコが、行ふ山の、椎か本 あなそばそぼし 常世に しあらねば〔優婆塞〕「因」

うばそぢ〔乳母育〕「名」 乳母の手で育てられること。

うばだいしゃ〔優婆提舍〕「名」(ハミダツの音訳) 仏語。「論義、法義の音訳」 仏語。仏の教説を仏自身、または弟子、解説、論議したものを。十二部經の一つ。た、經典の注釈書をもいう。・大乗義理一名十三者名優婆提舍、此名論義、二問答并律、名論義經。」うばたけ〔姥竹〕「名」 ①調子がよく整い、新しいもの。阿彌（猶）も輪廻の玄鉄は、此としても、すきのさがらぬ、猶も輪廻の玄鉄は、わねながらうつつらにや。・狂言不審紙、姥竹とは能き調子の竹あり。其通りに捨て度とて、其能尺八を竹へ当て節のさを見る。同し様成竹有と作る。其くられし手本の竹を姥竹と云ふ。松岡の伝。
・老女にたとえていう語。・俳諧、毛吹草追加中、姥竹うばたけの三ツ輪ぐむねも深雪(みやゆき)哉、重々種（種）、「俳諧、玉海集、四冬、姥竹かいてねねする粉雪かなう政」 閑園遺文

うばたま〔鳥羽玉〕「名」 ①植物、樟屋(ひおうぎ)の下餅菓子の一種。祝日、干玉を包んだ。・白砂糖を絞った餅菓子。人情本、肥井風呂時雨傘七回此の下が

練羊裘に烏羽玉のウバにて、金玉粧・菓子大立、烏羽玉は今まこの形になりに製して白きはおそろひ羽玉とするなり。③男が遊の髪を切ることを秘伝。・評判記・色道・鏡・六男、髪をきる時口伝ありこれをうばたまともふ也。④香木の名、真南蛮まなばんの名香。甘味を主とする。うば玉のよの問の風、朝・夕・思ふに過ぎて匂ふ梅が香の歌意による中院通村の命名。・評判記・難波の良は伊勢の白粉②銀はんをなす朽木がくろくの月影と見立。うげばたま①はんをあびてたしと⑤サボテンの一種、メキシコおよびアメリカ合衆国テキサス原産で観賞用として栽培される。羊毛状の頭部に淡紅色の小花をつける球状タマサボテン。アラカロイドを食み、食するに幻覚症状を起す。⑥黒館を龍輿りゅうのひびく聲状を記す。⑦園①植物を白い粉で包んだ菓子の名。青森県上北郡田舎の羽根黒玉①となるか(釈日本紀・袖中抄和訓栞)。またうばはウタマ(烏羽玉)、またはウバ(烏玉)となるか(釈日本紀・袖中抄和訓栞)。またうばはウタの転か(大言海)。 園②園③文明・雄略書

うばたまの 筋すじ) 黒い髪の毛。和泉式部緯集上「物をなみ乱れてぞ思ふ誰にかは今はなげかんなむはたまのすぢ」

うばたまの (烏羽玉①が黒いところから) ①くろ②黒③にかかり、さらに転じて④やま⑤闇⑥にかる(夜)ゆべた)かみ髪)ゆめ夢)など

まの夢になかなはなさまんうつにだにもあかぬけたましを清原深養父・浮世草子好色一代女三四烏羽黒うばたまの髪落おち)・俳諧・発句題義夏上烏羽玉の闇に玉散る松魚哉五雄①

うばたまの ① 園②園③天正

うばたまの (謎古丁史②名) タマムシ科の昆虫、体長四十四ミリ、船形を、暗い金銅色で、背に金銅色光沢のある縦・隆起がある。夏、松林にふつうに目られ、幼虫は枯れ松に穴をあけてすむ。美しいタマムシの雌しなわれないが別種。北海道を除く日々に本各地に分布。おばをまむ。

うばち①「乳母②名」(ちい)は「うば」の意の幼児語「うばは乳母④」に同じ。・浄瑠璃・傾城八花形③「イヤこけをする男はあれどうばちい出る人はないよ」をなつと云ひ云ひければ

うはつ「有髪②名」髪の毛をそらないで、はえたままきにしてはいる。また、その人。主としてそのようにな頭の僧をいう。・評判記・色道・大蛇七人衆たり、再縁をもとめる事たはず、鳥髪(うはつ)となり、尼となり、行儀正しく別殿をかまへ)・浄瑠璃・本朝十四年二月髪交りの有髪(ウハツ)の老人。身には皆皆髪交相ひて①) 園②園③余④

うはつ(の 尼あま) ①仏門に入って髪をそら

うは(一)鳥髪(二)黒い髪。改正増補和英語集庚戌集庚戌集庚戌集
 (Tasun)鳥髪(三)黒髪。開園會(四)
 うは(五)かゝ(六)右幕下(七)うばく(八)右幕(九)の
 變化した語。淨瑠璃、加増曾我十五うばく頼頼
 卿人(十)をすてさ(十一)給はぬあ(十二)り
 うは(十三)きう(十四)う(十五)へ(十六)あ(十七)り
 に曹洞宗の寺院で、卒塔婆(十八)とその上部に記す文
 字「随求陀羅尼經」の鵠の手を撰たといわれ、
 一、隨筆、海録六、烏八曰、禪家の寺の石塔に、
 白といふ字、上方の方にかゝる、或は鶴或は鶴に作
 る。多くは曹洞宗にあり、何の義といふ事をしらす
 ・隨筆、世百談二、烏八曰(ク、ク)かの寺
 旨の僧などにとどるものなく、わか(十九)しう(二十)
 白(二十一)う(二十二)へ(二十三)き(二十四)た(二十五)る(二十六)のみ、何の義
 といふこと詳(二十七)ま(二十八)び(二十九)るか(三十)なり
 うは(三十一)つ(三十二)は(三十三)つ(三十四)優鉢花(三十五)の香(三十六)を(三十七)いた(三十八)す
 ・親覺、鉢鉢三、宝給下、身の中よりせむた、何の香を
 たし口の中より優鉢花の香をいたす(三十九)開園集本
 うは(四十)つ(四十一)そ(四十二)う(四十三)有(四十四)髮(四十五)僧(四十六)名(四十七)頭(四十八)を(四十九)そ(五十)て(五十一)い(五十二)ない(五十三)僧(五十四)
 ・俗人に仏道を修行する者。開園ウハツソー
 (會)二
 うは(五十五)つ(五十六)ら(五十七)り(五十八)う(五十九)お(六十)う(六十一)リョウ(六十二)ウ(六十三)ウ(六十四)優鉢羅龍王(六十五)に(六十六)ヒ(六十七)シ(六十八)シ(六十九)シ(七十)シ(七十一)シ(七十二)シ(七十三)シ(七十四)シ(七十五)シ(七十六)シ(七十七)シ(七十八)シ(七十九)シ(八十)シ(八十一)シ(八十二)シ(八十三)シ(八十四)シ(八十五)シ(八十六)シ(八十七)シ(八十八)シ(八十九)シ(九十)シ(九十一)シ(九十二)シ(九十三)シ(九十四)シ(九十五)シ(九十六)シ(九十七)シ(九十八)シ(九十九)シ(一百)シ(一百一)シ(一百二)シ(一百三)シ(一百四)シ(一百五)シ(一百六)シ(一百七)シ(一百八)シ(一百九)シ(二百)シ(二百一)シ(二百二)シ(二百三)シ(二百四)シ(二百五)シ(二百六)シ(二百七)シ(二百八)シ(二百九)シ(三百)シ(三百一)シ(三百二)シ(三百三)シ(三百四)シ(三百五)シ(三百六)シ(三百七)シ(三百八)シ(三百九)シ(四百)シ(四百一)シ(四百二)シ(四百三)シ(四百四)シ(四百五)シ(四百六)シ(四百七)シ(四百八)シ(四百九)シ(五百)シ(五百一)シ(五百二)シ(五百三)シ(五百四)シ(五百五)シ(五百六)シ(五百七)シ(五百八)シ(五百九)シ(六百)シ(六百一)シ(六百二)シ(六百三)シ(六百四)シ(六百五)シ(六百六)シ(六百七)シ(六百八)シ(六百九)シ(七百)シ(七百一)シ(七百二)シ(七百三)シ(七百四)シ(七百五)シ(七百六)シ(七百七)シ(七百八)シ(七百九)シ(八百)シ(八百一)シ(八百二)シ(八百三)シ(八百四)シ(八百五)シ(八百六)シ(八百七)シ(八百八)シ(八百九)シ(九百)シ(九百一)シ(九百二)シ(九百三)シ(九百四)シ(九百五)シ(九百六)シ(九百七)シ(九百八)シ(九百九)シ(一千)シ(一千一)シ(一千二)シ(一千三)シ(一千四)シ(一千五)シ(一千六)シ(一千七)シ(一千八)シ(一千九)シ(二千)シ(二千一)シ(二千二)シ(二千三)シ(二千四)シ(二千五)シ(二千六)シ(二千七)シ(二千八)シ(二千九)シ(三千)シ(三千一)シ(三千二)シ(三千三)シ(三千四)シ(三千五)シ(三千六)シ(三千七)シ(三千八)シ(三千九)シ(四千)シ(四千一)シ(四千二)シ(四千三)シ(四千四)シ(四千五)シ(四千六)シ(四千七)シ(四千八)シ(四千九)シ(五千)シ(五千一)シ(五千二)シ(五千三)シ(五千四)シ(五千五)シ(五千六)シ(五千七)シ(五千八)シ(五千九)シ(六千)シ(六千一)シ(六千二)シ(六千三)シ(六千四)シ(六千五)シ(六千六)シ(六千七)シ(六千八)シ(六千九)シ(七千)シ(七千一)シ(七千二)シ(七千三)シ(七千四)シ(七千五)シ(七千六)シ(七千七)シ(七千八)シ(七千九)シ(八千)シ(八千一)シ(八千二)シ(八千三)シ(八千四)シ(八千五)シ(八千六)シ(八千七)シ(八千八)シ(八千九)シ(九千)シ(九千一)シ(九千二)シ(九千三)シ(九千四)シ(九千五)シ(九千六)シ(九千七)シ(九千八)シ(九千九)シ(一万)シ(一万一)シ(一万二)シ(一万三)シ(一万四)シ(一万五)シ(一万六)シ(一万七)シ(一万八)シ(一万九)シ(二万)シ(二万一)シ(二万二)シ(二万三)シ(二万四)シ(二万五)シ(二万六)シ(二万七)シ(二万八)シ(二万九)シ(三万)シ(三万一)シ(三万二)シ(三万三)シ(三万四)シ(三万五)シ(三万六)シ(三万七)シ(三万八)シ(三万九)シ(四万)シ(四万一)シ(四万二)シ(四万三)シ(四万四)シ(四万五)シ(四万六)シ(四万七)シ(四万八)シ(四万九)シ(五万)シ(五万一)シ(五万二)シ(五万三)シ(五万四)シ(五万五)シ(五万六)シ(五万七)シ(五万八)シ(五万九)シ(六万)シ(六万一)シ(六万二)シ(六万三)シ(六万四)シ(六万五)シ(六万六)シ(六万七)シ(六万八)シ(六万九)シ(七万)シ(七万一)シ(七万二)シ(七万三)シ(七万四)シ(七万五)シ(七万六)シ(七万七)シ(七万八)シ(七万九)シ(八万)シ(八万一)シ(八万二)シ(八万三)シ(八万四)シ(八万五)シ(八万六)シ(八万七)シ(八万八)シ(八万九)シ(九万)シ(九万一)シ(九万二)シ(九万三)シ(九万四)シ(九万五)シ(九万六)シ(九万七)シ(九万八)シ(九万九)シ(十万)シ(十万一)シ(十万二)シ(十万三)シ(十万四)シ(十万五)シ(十万六)シ(十万七)シ(十万八)シ(十万九)シ(十一万)シ(十一万一)シ(十一万二)シ(十一万三)シ(十一万四)シ(十一万五)シ(十一万六)シ(十一万七)シ(十一万八)シ(十一万九)シ(十二万)シ(十二万一)シ(十二万二)シ(十二万三)シ(十二万四)シ(十二万五)シ(十二万六)シ(十二万七)シ(十二万八)シ(十二万九)シ(十三万)シ(十三万一)シ(十三万二)シ(十三万三)シ(十三万四)シ(十三万五)シ(十三万六)シ(十三万七)シ(十三万八)シ(十三万九)シ(十四万)シ(十四万一)シ(十四万二)シ(十四万三)シ(十四万四)シ(十四万五)シ(十四万六)シ(十四万七)シ(十四万八)シ(十四万九)シ(十五万)シ(十五万一)シ(十五万二)シ(十五万三)シ(十五万四)シ(十五万五)シ(十五万六)シ(十五万七)シ(十五万八)シ(十五万九)シ(十六万)シ(十六万一)シ(十六万二)シ(十六万三)シ(十六万四)シ(十六万五)シ(十六万六)シ(十六万七)シ(十六万八)シ(十六万九)シ(十七万)シ(十七万一)シ(十七万二)シ(十七万三)シ(十七万四)シ(十七万五)シ(十七万六)シ(十七万七)シ(十七万八)シ(十七万九)シ(十八万)シ(十八万一)シ(十八万二)シ(十八万三)シ(十八万四)シ(十八万五)シ(十八万六)シ(十八万七)シ(十八万八)シ(十八万九)シ(十九万)シ(十九万一)シ(十九万二)シ(十九万三)シ(十九万四)シ(十九万五)シ(十九万六)シ(十九万七)シ(十九万八)シ(十九万九)シ(二十万)シ(二十万一)シ(二十万二)シ(二十万三)シ(二十万四)シ(二十万五)シ(二十万六)シ(二十万七)シ(二十万八)シ(二十万九)シ(二十一万)シ(二十万一)シ(二十一万二)シ(二十一万三)シ(二十一万四)シ(二十一万五)シ(二十一万六)シ(二十一万七)シ(二十一万八)シ(二十一万九)シ(二十二万)シ(二十二万一)シ(二十二万二)シ(二十二万三)シ(二十二万四)シ(二十二万五)シ(二十二万六)シ(二十二万七)シ(二十二万八)シ(二十二万九)シ(二十三万)シ(二十三万一)シ(二十三万二)シ(二十三万三)シ(二十三万四)シ(二十三万五)シ(二十三万六)シ(二十三万七)シ(二十三万八)シ(二十三万九)シ(二十四万)シ(二十四万一)シ(二十四万二)シ(二十四万三)シ(二十四万四)シ(二十四万五)シ(二十四万六)シ(二十四万七)シ(二十四万八)シ(二十四万九)シ(二十五万)シ(二十五万一)シ(二十五万二)シ(二十五万三)シ(二十五万四)シ(二十五万五)シ(二十五万六)シ(二十五万七)シ(二十五万八)シ(二十五万九)シ(二十六万)シ(二十六万一)シ(二十六万二)シ(二十六万三)シ(二十六万四)シ(二十六万五)シ(二十六万六)シ(二十六万七)シ(二十六万八)シ(二十六万九)シ(二十七万)シ(二十七万一)シ(二十七万二)シ(二十七万三)シ(二十七万四)シ(二十七万五)シ(二十七万六)シ(二十七万七)シ(二十七万八)シ(二十七万九)シ(二十八万)シ(二十八万一)シ(二十八万二)シ(二十八万三)シ(二十八万四)シ(二十八万五)シ(二十八万六)シ(二十八万七)シ(二十八万八)シ(二十八万九)シ(二十九万)シ(二十九万一)シ(二十九万二)シ(二十九万三)シ(二十九万四)シ(二十九万五)シ(二十九万六)シ(二十九万七)シ(二十九万八)シ(二十九万九)シ(三十万)シ(三十万一)シ(三十万二)シ(三十万三)シ(三十万四)シ(三十万五)シ(三十万六)シ(三十万七)シ(三十万八)シ(三十万九)シ(三十一万)シ(三十一万一)シ(三十一万二)シ(三十一万三)シ(三十一万四)シ(三十一万五)シ(三十一万六)シ(三十一万七)シ(三十一万八)シ(三十一万九)シ(三十二万)シ(三十二万一)シ(三十二万二)シ(三十二万三)シ(三十二万四)シ(三十二万五)シ(三十二万六)シ(三十二万七)シ(三十二万八)シ(三十二万九)シ(三十三万)シ(三十三万一)シ(三十三万二)シ(三十三万三)シ(三十三万四)シ(三十三万五)シ(三十三万六)シ(三十三万七)シ(三十三万八)シ(三十三万九)シ(三十四万)シ(三十四万一)シ(三十四万二)シ(三十四万三)シ(三十四万四)シ(三十四万五)シ(三十四万六)シ(三十四万七)シ(三十四万八)シ(三十四万九)シ(三十五万)シ(三十五万一)シ(三十五万二)シ(三十五万三)シ(三十五万四)シ(三十五万五)シ(三十五万六)シ(三十五万七)シ(三十五万八)シ(三十五万九)シ(三十六万)シ(三十六万一)シ(三十六万二)シ(三十六万三)シ(三十六万四)シ(三十六万五)シ(三十六万六)シ(三十六万七)シ(三十六万八)シ(三十六万九)シ(三十七万)シ(三十七万一)シ(三十七万二)シ(三十七万三)シ(三十七万四)シ(三十七万五)シ(三十七万六)シ(三十七万七)シ(三十七万八)シ(三十七万九)シ(三十八万)シ(三十八万一)シ(三十八万二)シ(三十八万三)シ(三十八万四)シ(三十八万五)シ(三十八万六)シ(三十八万七)シ(三十八万八)シ(三十八万九)シ(三十九万)シ(三十九万一)シ(三十九万二)シ(三十九万三)シ(三十九万四)シ(三十九万五)シ(三十九万六)シ(三十九万七)シ(

うはねかんひんぎ【于撥千引】連語。漢字の「于」(う)より。
うはねはね、「うかん」は下をねないでまっすぐぐぐぐと下に引くといいこと。字形の「于」と「う」の区別を教える語。
うばのたまも【鳥羽玉藻】連語。美しくつややかなな黒髪。昔川集年ふればむばのたまも老いにけり鳥の髪に雪つもりつ。
うばのてやき【名】因国植物。①ねじき撥木。高知県南郡②あせび鳥麻木。周防および長門③しやしや【名】(南備)。高知県南郡。
うばのふところ【名】因国日当たりのよい暖かい所。奈良県吉野郡天川④うばのつくら長崎県北松浦郡佐佐。
うばが【名】(姥鰻)「名」魚うばざめ(姥鰻)の異名。
・大和本草一三「ふかへ略うばふか六七尋あり。歯なし」【因国産】
うばほお【名】は「姥鰻」【名】武器。鉄面(かなめん)の一種である面頬(めんぱ)はおの一つ。願(おとが)いがあつ、皺が多く、ひくけないもの。
うば三年【名】(姥鰻)「名」江戸時代。俗に、和船の船舶一、二、三年以後のものを用いる。一般に江戸時代の大船一艘は建造後二〇年程度使用でき、古船・造船心得集「造立より六七年を新造、又六七年を中年船、又六七年を古船あるは婆九云」。
うばめ【名】(姥女)「名」老女。
うばめ【名】(姥女)「名」植物。うばめがし(姥目懸)の異名。
・長塚節歌集長塚節明治三六年真熊野の熊野の山におる樹の姥女木(ウバキ)の洞のうづの蘆木鼓(たいたい)。
うばめ【名】(乳母女)「名」乳母めのこと。
・聞書集「いち子もるうはめをうな重ね持つ児手柏(こ)のてがしはに面ならん」。
うばめがし【名】(姥目懸 姥芽瞞)【名】ブナ科の常緑小高木。暖地の海岸近くに生える。高さ一〇メートル達する葉は互生し、長さ三〜六センチの倒卵形または長橢円形で、厚質、上半部の縁に低鋸歯(てきさ)の花が咲く。実は翌年の秋に熟し、一、二センチの卵形で、食用。材は堅く、良質の炭になる。うばしば。うばめ。いまががし。うまめがし。うばめがし。大和本草批註「一二うばしばうばめ誤てうまめと云。うばめかし。かし類なり」。
・日本植物名鑑(松村任三)イマイガシ ウバメガシ チリメンガシ 【因国産】
うばめがしわ【名】は「姥目懸」【名】植物。うばめがし(姥目懸)に同じ。

うばめ(の)異名。(註目木)名。植物うばめがし(註目木)の異名。

うばやく【乳母役】(名) 乳母となつて子りする役目。●浄瑠璃、双生福田川・道行・布袋は唐子のおうばやく、円蔵(うんさ)は鬼の旦那也。〔園田會之四〕

うばやくん【建樹】(名) 老木の樹也。●俳諧・洗濯物春(風の)手も糸をひねるや建樹(樹)豊長。

うばやまかいづづか。からか【建山貝塚】千葉県市川市建山にある縄文・後期の大規模な貝塚。大正一五年(一九二六)以来の発掘で、堅六住居址二三、埋葬人骨約四〇体発掘。〔園田會之四〕

うばゆ【鵜羽湯】(名) うぶゆ(産湯)に同じ。●神道集十六、六「鵜羽湯を浴せすして殺せる罪の深きと仰せられて泣き給へば」。●運歩色葉「鵜羽湯ウバユ又産湯」。

うばゆり【筵百合】(名) ユリ科の多年草。中部、関東以西の山野の日陰に生える。高さ約一センチ。夏葉を出し、その頂に緑白帯で長さ七〜一〇センチにわたる漏斗形の花が横向きに咲く。地下に卵形の鱗茎にふくらんだ葉があり、良質のどんぐんがとれる。葉は楕円状心臟形で先がとがり、長さ約二〇センチ。若葉は食用となる。とかぶり、ねずみゆり、重訂本草「鵜羽目啓蒙九山草」貝母ははくり(延喜式)略(集解)頌曰似蕎麥(そば)葉云云。是は蕎麥葉貝母なり。山中に多し。俗名がはくり京、あまけんりへ略うばゆり阿州、勢州。日本植物名彙集村居三マウバユリ、ガハユリ、蕎麥葉貝母。〔園田會之四〕

うばゆり【蕎麥葉貝母】(名) 園田花が、開くとき、葉はすでに枯れて無いことから「本草綱目啓蒙。園田會之四」ウバユリ・エビヤ・オオバコ・オバユリ・オバユリ・オバロ・オバロ(津經語彙)オバロ(青森・ペャロロ)。

【秋田】會之四

うばら【免座】律津国の古郡名。「万葉集」では宇奈比とあり海原の意と思われる。和名抄「以後、宇波良といひて。明治二十九年(八九六)兵庫県武庫郡に合併後廃止。うばら。二十巻本和名抄五「摂津国略略免座八宇波良」。今昔・三五「忽ち本山の山を去て生国に行て、免座と云ふ所に籠り居て」。〔園田會之四〕

うばら【英】(名) (平安時代には「むばら」と表記されたが「うばら」の方が古い)。①とげのある小木の総称。いばら。うらら。おまら。〔方輿記一六三三八三〕

「枳からたちの棘原うばら刈り除さけけ立立てむ原くそ遠くまれば」

●新撰字鏡「無志名志又宇波良又須須」。伊勢物語「語六三」「ばらから野老」の異名。●季夏。●本草和名「宮実一名塙麻一名塙麻。略和名宇波良乃乃」。●俳諧「木吹草二中夏へ略」むばらの花。●白羊宮薄田泣草「難波うばら(人待ちなれし真難波)まぶさ」

きねに難波薙薙(な)はウバ(ら)香に(は)よ

(3) ウキハリ(憂刺の約転名言通)。〔図説繪巻②〕
古語「辞典(大辭林)の転ドゲのあることから日本植物物のうばらに似ていることから名づかれたものか。*大智度論平安初期点一六「若しは機若しは罽ウハラをもて人を侮けし」

うばら【姥等・婆等】一名①京都で歳末に出る女々食の一種《季・冬》一人倫訓蒙圖彙七「姥等(ウバラ)女の物もらしい」ともしは若いれどもみづから婆等(ウハラといふ。十二月廿日)り出る。下京は五日六日の比ころも出る也。赤垂垂手拭かつぎ、いさを手に持て、婆等ウハラをくめせうと、幾人も、連に口々にわめて、門々をめぐむ也」。続春夏秋冬東碧梧桐老冬小原女に立交り来る姥等かな碧童」
本春雨物語宮木が塚「物に馴たるうばら一人わらひさへも人へて小舟にてこき出す候せきぞうの妻。京都則二(大腹の意)穂の出よとする頃。富崎県東諸郡都穆佐佑うばらおとめ：をぬ(免原処女)うないおもと雀(免原処女)の別訓。

うばらくつわ【葵葉銜一名】唐鞍からくりしに用いる銜くつわの一種。面懸おもいがけける立間(たちまぎき)のものとの鏡板(かがみいた)が葵葉の葉の形をしてゐる形状似てゐることによる名称。うまらくつわ。「十卷本和名抄」五「葵葉銜 弁色立成云葵葉銜八字波良貝書」〔図説繪巻③〕
うばらこぎ【小木小一名】茨の小さい木。風俗歌詠に遺休源沙所収「うばらこぎの下には 鼯鼠(いちぢき)吹く猿あかなづ。栗葉秘抄二四句神歌「うばらこぎの下こそ、鼯(いちぢき)が笛吹く猿舞なかなで」。俳諧崑山集六夏下花にかかる岩根の母やむはたつも貞徳」

うはらつとも【卯辰辰股】「連語」「うはらたつともも(卯辰辰股)寅背中(とらせなか)」の略。『浄瑠璃』頃、城反魂香中「灸やひとますあたしうはら辰もせせなかに、未の辰は、商売にあへられず」。『雜俳』武玉川「八(卯辰辰股)たまへてすへ」

うはたつとも【寅背中(とらせなか) 灸をするのを怠日と、からだの部位との關係を示したことにちなむ、卯の日は腹に、辰の日は灸に、寅の日は背中に、未の日は頭に、申の日は尻に灸をするのを怠けること。うはたつともも 卯辰辰股寅背中未



姥等① 〈人倫訓蒙図

(ひじ)の頭かしらに申さるの尻。歌謡秘話の落葉二、次多そが、卯腹辰腹寅背ウハタツモトラセナカといひて笑み顔がウの」
 〔補註〕拾芥抄・養生部第三九に時、日、年によつて身体の各部分に移動する人の神といふものがあり、その場所に依はりや炙きうをするものと、を忌むといふ説があるが、この種の陰陽道おんみょうどうの禁忌が、鍼灸聚英などの鍼灸書に取入れられて、江戸時代に流布した。

うばり〔優婆離〕〔梵〕Upasikaの音訳。優婆離、即波離なるとも音訳する。仏十大弟子一人。持律第一と称せられ、仏滅後、第一結集つじゅうに当たつて律を誦出(じゆしゆ)した。四分律五十四時大迦葉即作自言。大僧禮敬。若僧時到僧忍禮。僧今大迦葉難法毘尼。白如是。時優婆離即作白。僧大德禮敬。若僧時到僧忍禮。僧今上座大迦葉問我答。白如是。〔國語彙林〕

うばり〔動〕因圓は物がうんで口があかないままにうむ痛む感し。島根県那賀郡三ノ宮山正一祝。新井雨飛のうひ〔雨飛〕名。雨が風に飛ばされながら降ること。また、その氏に物へ飛んてくること。テニソの兵隊騎隊進撃の時、外山正一祝。新井雨飛の間にも、猛り立てて進むなる。麦と兵隊火野蒼平。彈丸雨飛の中をのろくさと歩き廻つて居る。杜申解題詩草園紫扉星散居。浪翻江黑雨飛初。〔國語彙林〕

うひ〔烏牌〕名。洪柿(しぶがき)をいう。明衡往來中本。石雖非烏牌之末。已異夫烏之類。うひ〔憂患〕うれいや悲しみ。●維談集三、東成緩急事。葉天が云。世上憂患ウヒを忘る。第一には縁に如かす。●淮南子。原道訓。喜怒哀道之邪也。憂患者德之失也。〔國語彙林〕

ウビガン(Houdigan) フランスの化粧品会社。またその会社社長の高級な香水。私の東京地居佐多種子挽歌。ウビガンの香水や、ビノールのローション。●筑城井上婿みどりの手紙。所構はずウビガンの粉を撒散らしました。うひくう。う。タナウ。憂患苦惱〔名〕憂いと悲しみと苦しみと悩む。●こんてんぶつすむん(掬世録)三二〇。現世の難儀。憂患苦惱うひくうなを能く堪忍すべきをいふ。●日葡辞書。U. de. u. (ウ、ヒ、ナウ、ウレ、イ、カニシ、クルシ、ナヤム)。〔國語彙林〕

うびた(ウビタ) 鯉の腹部にある。第四番目の右のひれ。●随筆。貞丈雜記六。庖丁右の家にてウ鯉の名所の事。略うびたは腹の方第四の右のひれなり。うびたい。びたい。戴星〔名〕うびたい(戴星)の馬(うま)に同じ。〔國語彙林〕今更平安○○●○○(余)○

うびたいの馬(うま) 額の上に白い斑文のある

(神)③に同じ。・御伽草子「御身に入らせ給ひて」とどまりて、うぶの神誕生し入るるをめぐりて
因国①にお産の神。奈良県69 愛媛県温泉郡神和044
②産土神(うぶすながみ)。神奈川県津久井郡285名
古屋戸(おほのかみさき)群馬県多野郡万寿470
うぶの土民(どみん)生まれながらの土百姓。浄瑠璃・源頼家源実朝鎌倉三代記「死したる藤三が名をかって、うぶの土民に拵(こしらへ)すましうぶの宮(みや)産土神(うぶすながみの社殿)」。信濃国埴科郡解原在中条宮弁才天由来記当所のうぶいあけ〔産明〕名「うぶやあき(産屋明)」に同じうぶいあけ〔産上〕名「うぶやあき(産屋明)」に同じうぶいあけ〔産井〕名「産湯(うぶゆ)の水を汲く」む井戸。
うぶいあける(うぶい)姓氏の一つ。(因国繪之図)
うぶい【初】形口「生来のもので飾りのない。うぶいしい」。泥人形正宗白鳥「三口」を着たまま目を据ゑて重吉を見て、「よく初心(ウツイ)のと、力を込めて云つて」
うぶいれ【産石】名「出産直後に供する産飯(うぶめ)境内などから拾ってきた小石。産神(うぶがみの御神体といふ)地方もあるように、産神の靈かよとったものと考え、赤子にあてがつて霊を補強しようとする呪術信仰に基づく。のちは、赤子の歯や頭を丈夫にするためなどという。(因国繪之図)ウィットンビィツカン・フィレンツェの美術館イ宮にある美術館イタリアリアルネサンスの傑作が多い。(因国繪之図)
うぶいれ【産人】名「(うぶは霊魂のこと)小児が物に驚いて氣が遠くなる(うぶるとき)、魂を戻しなされる呪法。杓子で招くとか、水を飲ませるとか米粒を頭にのせるなどの方法がある。おおいれ。
うぶいわい。いはば「産祝(名)出産の祝い。妊娠中に産座見舞の意味で飲食物を祝うものと、生まれてから人を招いて祝うものがある。・浄瑠璃争常盤露のつわいれでうぶ祝ひ申べし」(因国岐阜県郡部郡上郡45大分県49 因国繪之図)
うぶうぶ(うぶふ)他(四)(おぶう(負)の変化した語背負う。・天正本狂言「袖食山伏」うぶって帰る。後ならげるとも)因国山形県南部60 福島県東白川郡393 茨城県201 群馬県吾妻郡233 埼玉県秩父42 千葉県山武郡236 長野県下伊那郡533 (うぶう)群馬県山田郡294 静岡県駿原郡566
うぶうぶしい(一生)「形口」いうういしい。「小皇皇子の果鈴木三重吉下二七その時の生(生)ウブッウブの花のやうに、おらしく目に写る」

うぶかき・産痘(痘)「うぶがき」とも。赤子がうぶで生まれた頭の瘡。●日葡辞書「Ubucazo(ウブカサ)」または「Ubucazo ウブガサ」。または「ウブセ」

うぶがせ「産風邪」名「生まれたての赤子がかかる風邪」●日葡辞書「Ubucazo(ウブカセ)」ヒク

うぶがたな「初刀」名「刀をさす練習のための子供用の刀で、切れないもの」

うぶがみ「産神」名「(うぶかみ)とも」①出産の前後を通して、妊婦と幼児を見守ってくれると信仰される神。妊婦や産産に安んずると信じられている神。著名な大社、部洛鎮守小祠など種々の場合がある。うぶのかみ。●都鄙問答四・或人神語を問、問本へ参り候所、産神「ウブガミ」へはまじり申さす候」

②出産の場に立会い、見守ってくれると信じられている神。東北地方では山の神をこの神だとする信仰が強く、山の神が来ないとお産ができないなどといいますが、陣子の機や長持の上に腰かけているという伝承も広くある。あるいは帚神だとする信仰も広く、出産のさいに帚を立てたりする。出産時の呪術として、帚のようなものを使ったことによるかともいわれる。うぶのかみ。●日葡辞書「Ubucazi(ウブカミ)」ウブノカミとも言い、その方がまざる。●浄瑠璃日本文武尊吾妻鑑四・顔美しう産せたる。うぶ神にも恨み有」③赤子に入れるべき霊魂の称。生まれたばかりの赤子は、赤なる肉塊と考えられていたので、そこりに小石などに象徴された霊魂をあてがひ、成育をうながす必要があると考えられた。うぶのかみ。●関園「ウブガミ」●関⑩

うぶがみ「産髪」名「(うぶかみ)とも。主として頭髮をさす」●うぶげ「産毛」に同じ。●日葡辞書「Ubucazi(ウブカミ)」●浄瑠璃・浦島年代記四・つと延びたる男子の姿、産髪「ウブガミ」左右へ乱れ散り・開化の入口・横河秋藤上・皇国も天子は昔から生髪(ウブガミ)をその儘太き様の間は(矢張撫つけ)」

関園「ウブガミ」●関⑩

うぶがみももて「まうで・産神詣」名「うぶすなま(産土参)に同じ。●浄瑠璃・松風村雨東帯鑑一「けふ百廿日の御忌明略・よはひ千とせの坂本に産神もふでときこへける」●関園「ウブガミモ」デ

うぶがみもんど「モンダブ」産神問答」名「産神や山の神が赤子の運命を定めることを発端とする世話話の一形態」

うぶき「産気」名「胎児が生まれそうなのはいいことになること」●因習新島県東蒲原郡津川415岡山市付近「うぶきがついでから直き生れた」加

うぶき「産衣・産着」名「(うぶきとも)」「うぶぎぬ(産衣)に同じ。●日葡辞書「Ubuqui(ウブキ)」または「Ubuqi(ウブキ)」●俳諧・大子集三・若竹(かまき)は竹の子其の生着哉貞徳」●浄瑠璃・国性爺合

戦ち、御座ふやと用意ある。・書言字錦^{（一）}節用集十六、産衣ウラキヌヲウブギ。^{〔園田〕}
後「ウブキン」云々（鳥根ウブギン）（島原方言）オフギ（鳥取オフギ）（岐阜・愛知・大和と歌山県・NHK高知）オボキ（青森石手）オボギ（茨城・鳥取 NHK 山梨）オボギ（岩手）オボキ（秋田）^{〔園田〕}オボギ（津軽語彙）^{〔倉之田〕}余之^{〔園田〕}ウぶぎぬの祝い哉）。赤子が生まれて初めて着るものを着るの祝儀式。

●赤子が生まれて初めに産衣を着るの祝の儀式。凡そ赤子の祝い。『陸奥貞丈雑記』一、産着の祝の事。凡産衣と云名は義教授軍家の比より此名聞えしなり。猶已前よりの事なるべき歟。其始は詳ならず。産衣を始めて着するを着衣の祝と云なり。

うぶぎぬ【産衣】一名「うぶぎぬとも」生まれたばかりの赤ん坊に着せる祝い着。陰陽師にはかつて赤子の性（しょう）に合う吉色を染めて着せ、鶴龜松竹などのめでたい模様をつけることがある。うぶぎぬ・赤染衛門集うぶぎぬとどめたりしが、まもりこそふるものなりてと、こひたりしにかへり。・大鏡序「うぶぎぬにかきおきて侍りける。いまだばへり」

●日葡辞書「Vubagunhu ウブギヌ」。または、vobonhu（ウブキヌ）・『陸奥貞丈雑記』三、「うぶぎぬは小児誕生の時、陰陽頭にへ略仰付られ小児の性に合て吉き色をかながへさせて、其色に染て着する事古也」と因置。生まれたばかりの赤ん坊に着せる着物。沖杵川県津久井部郷（うぶぎん）大分県阿（うぶぎん）石見 712 長崎県西彼田郡樺島町（おぶぎん）山口県大島町 720 産衣にする布帛。（うぶぎん）山口県豊浦郡豊東 722 産衣にウブギヌ 備之出

うぶぎぬふくさ【産衣袱紗】一名 赤子を産湯から取り上げるとき用いる白羽二重、または白絹の袱紗。

う・く【有徳】一名「うとくせん（有徳銭）と同じ。」

●陸奥軒日録寛文四年二月二十四日「等待院領播州所々守護山名方、被懸有福之事、以無先規之故、以訴狀被申之」

うぶく【他力下ニ 突きゅう】のあとがただれる。

●日葡辞書「Vbuge, uniu, eta uunkal」

うぶげ【産毛・生毛】一名 ①「うぶげとも」子供が生れ七日目にその風習がある（歴世女装巻）。柔服秘抄二・四句神歌鳥の子にもあらねども、うぶも変はらで帰れたや・運歩色葉産毛ウブゲ。・日葡辞書「Vbuge ウブゲ」訳亦兄のかたに生えて、桃の実などに生えているぐじやわらかな薄毛。・日葡辞書「Vbuge ウブゲ」訳二歳または三歳までの幼児に生えてくる毛。・評判記「秘伝書」下ほの事もめづるに生えてくる毛。・或る女有烏丸にてぬぐいてる毛。・暖かに桃の膚のやうに生氣ウブゲ

二郎後二四「暖かに桃の膚のやうに生氣ウブゲ

の生れた定子の類に 〔園圃ウブグ 金毛ウズグ 〔南知多〕オブク 岡山〕オブグ 〔岐阜志摩・紀州和歌山県〕オブグ オブグ 〔秋田〕オボク 山形小国 金毛ウズグ 〔園圃圖書〕

⑩ 金毛ウズグ 〔園圃圖書〕

うぶげも 生えぬ者（もの） 初心で無知な人。未熟な者を比喩的にいう語。うぶげもはえぬ者。・日葡辞書〔Duboulet ウブゲ〕 スケス ヒト

うぶげも 生えぬ者（もの） 「うぶげ 産毛」の抜けぬ人」に同じ。虎寛本狂言「柿山伏」まだうぶ毛もはぬぬのを飛せと云ふ

うぶげや 〔産毛〕名 陰毛の薄い女。俳諧・俳諧三十棒「扱はまさまき此箱の内を開き見るに、うぶげやの毛拔也」。雑俳「手引草」さっぱりとうぶけ屋敷の閑所也

うぶける 〔自カ下〕 飯などがふやける。・荻萩（仙台）「うぶける 飯に湯や茶などがけたるが、手間とりてめしのふゆること 江戸 ふやける」 〔因園宮城県栗原郡山〕

うぶこ 〔産子〕名 産土神うぶすながみを同じくする人。・神道名目類聚抄四此地に出生の児は、上下の御霊社を産土とし、児を御霊の産子（ウブコ）とす 〔園圃圖書〕

うぶこ 〔産子〕名 （「うぶこ」とも） 生まれたての子。あかこ。・日葡辞書〔Vuboo ウブコ〕・淨瑠璃・弘知法印御伝記初段「人はた今生れしうぶこにて、死人をみれば找つとも」。・洒落本大抵御覧「老若男女を論せうぶこはふこにいたるまで」 〔園圃ウブコ 金毛ウブコンボコ 山形 オバコ 山形 福島 オバコ 秋田鹿角 オバコ 青森津軽鶴巻津軽ことば 岩手 仙台台方 山形小国 福島 オバコ 山形 山形小国 オバコ 岩手 オバコ 山形小国 秋田 オバコ 福島 金毛ウブコ〕

うぶこ 〔えこ〕名 〔産声 初声〕名 （「うぶこ」とも） 赤ん坊が生まれたとき、最初にあげる泣き声。はつこえ。・日葡辞書〔Vuboo コ〕・俳諧・新類題笈句集雑雑「産声に哭のびきや桐の花良琴」・新梅花詩集中西梅花 鈴御前「裳屋にも」にあげる初声（ウブゴ）の 〔園圃ウブゴ 金毛ウブゴ 金毛ウズグ 金毛ウズグ〕

うぶこて 〔産籠手・掣小手〕名 近世の道具。籠手の一種。肩当（かたあて）に左右の籠手の家（ひじ）を連接したるもの。説に産籠（さんろう）や臂金（ひぎ）がぬを家のなかに包んで表面にあらかさないものと云ふ。・武具短歌（針）ては掣小手（うぶこ）て、地半籠手、小松籠手、まづわ小手に稲荷小手、筒小手、篠小手、柳籠手、うぶざ 〔産座〕名 産婦が使うねど。産褥（さんじょ）や産床（さんじょ）

ウブサラだいがく 〔大学〕（Ubusara University） スウェーデンの南東部ウブサラにある総合大学。

うぶすなは氏神と混同されている。鎮守神。うぶすな、うぶのかみ。「産土神」に「生まれた土地の守護神」近世以降は氏神と混同されている。うぶすな、うぶのかみ。うぶがみ。うぶすなのかみ。●随筆・貞丈雑記一六「氏神（うじがみ）と産土神（うぶすな）ナカニ」と一事に覺たる所あり、あやむかひ也。産土神は人生れたる在所の鎮守の神也。氏神は氏の元祖神也。〔園圃ウブスナガミ 儼之因 余之因〕

うぶすながみ「産土柄」形動。生まれた土地がちら。●歌舞伎・浮世世柄比翼稲妻（箱田）二幕 野郎はちっと小せえが、産土柄（ウブスナガラ）で胆が大きい。うぶすなまじり「産土参（参）」産土神（うぶすな）がみに詣でること。とくに、生児がはじめて産土神に参詣すること。その時期は、生後二、三日ごろ。三日月目前後、百日目など一定しないが、産土忌の忌明けの時期に合わせる場合が多い。男児は三日の目、女児は三日月目など、男女によつて数日違えることがあつた。また、一月一日の行事といふこともあつた。うぶすなもうで。『走象故実』天五年十一月廿八日若君様始て御うぶすな参。還御候て各御太刀参参。●東都歳事記正月元日「毎月産土神（うぶすな）参。毎月朔日十五日廿八日の三日には貴族士女（うへず）へ詣り。〔園圃余のオホスナメのヨリ（岩手） 儼之因〕」

うぶすなまつり「産土祭・城隍祭」産土神（うぶすな）がみの祭。読本・桃説司張月・統・四〇回以上。●間切「まきり」毎の城隍祭ウブスナまつりに、以上から興行するとなん。●高橋阿伝夜又譯仮名垣魯文・初二回「産神祭祀ウブスナまつり」の神楽の音

うぶすなもうで：まうで「産土詣」名。「うぶすなまじり（産土参）に同じ。女用智慧鑑「生土詣（うぶすな）もうでは男子三十二日目、女子は三十三日めなれ。今いづれも三十日を用ゆ。其の生れたる地をちらしめ」の神へ参るなり」〔園圃ウブスナマデー 儼之因〕

うぶすずり「産刺」名。「うぶすずり（産刺）に同じ。●雄俳・柳宮二「うぶすずりをすりと赤子の情らしむ。うぶせ」〔産瘞〕名。「うぶかき（産瘞）に同じ。日備辞書「ウブカサ。または、ウバガサ。または、ウバセ」。

うぶせ「産瘞」名。「うぶかき（産瘞）に同じ。●日備辞書「ウブカサ。または、ウバガサ。または、ウバセ」。

うぶせり「産刺」名。生児の頭髪を剃ること。期日は一定しないが、三日月、五日目、七日目、一二日目などがある。名付祝や孫祝などと一緒にすることが多く、宴を催すことが多い。かみたれ。うぶすずり。●雄俳・柳多留二「うぶせりたすきつして餅に付。●随筆・貞丈雑記二「小兒うぶ湯の後湯あびせるをを湯初祝と云。うぶせりを剃髪祝と云。うぶぎぬ湯を初て着るを着衣祝と云」〔園圃儼之因〕

うぶたち「産立」名。「うぶたて（産立）に同じ。うぶたちの祝（いわい）」「うぶたて（産立）に同じ。●随筆・貞丈雑記二「子戴の餅 四条流歌方口伝書

備置き、産婦へ七夜に祝はせ申也。」
うぶなて〔産立〕名 出産直後の飲食。または、産後三日目または七日目、一二日目などに聞く宴。元來産後は生養後、産神うぶがふに供するといひ、共同飲食の儀式之法の事、御誕生後三日のうぶなて、七日のうぶなては是不同の儀也。運歩色葉〔産立〕ウブナテ産神うぶがふに供する儀。うぶなて、産婆や関係者、近隣の人を招いて飲食する。うぶめし、産婆（さん）のめし。因圓うぶなてまき 新親類横岩船部下川郷（おほたてのめし）群馬県勢多郡横岩233
うぶだな〔産棚〕名 出産の用具を入れるため、産所に備えつける、白木造りの三重の棚。
うぶち〔産血〕名 出産のときに出る血。分娩後の血、生理的な子宮出血。
うぶぢち〔産茶〕名 四月八日の灌仏会かぶつえに釈迦の像に注ぎかける甘茶。→卯月八日
うぶぢヤンバ〔生天婆〕名（うぶが）は生粋きつすいの意。チャンバは古城國の名。安南國今のカムボジアに辺にあったといふ。江戸時代安南地から輸入した、黄色な帯のた上等の絞皮。刀剣を飾るのに用いた。浮世草子「昼夜用心記」五四「脇差を手に持つて勝手（行）に参上するに、先づ揃への結構語を言へ」（こん）に絶えたり、較は玉蜀黍なんばんきびを」並べたる生天婆ウブヤンバなり
うぶつ〔有仏〕名 仏語。仏が、この世にあること。うぶな 仏が、この世にあつて。→無仏。●無量壽經上「爾時次有、仏、名世自在王如來応供等正覺明行足善逝世間解無上調御丈夫天人師仏世尊」
うぶどの〔産座〕名 子供を産むのに用いた敷合。うぶが。●書紀仁徳元正正月（前田本訓）「初め天皇生るふが、（あ）れます日、木寛つて、産座ウブドノに入と」
うぶなこ〔生中子・生中子〕名（なこ）は、刀身の柄に披われた部分、刀剣の中心の一つ。原作のままでも、あてて他人が手を加えていないもの。
うぶな〔名〕因圓（う）こん天根、琉球宮古島044
うぶね〔鵜舟〕名 うかい、うへた（鵜船舟）に同じ
うぶね・●嬉給中「天祿二年うへたなるこがることとをたぬぬれ、胸のはけはうぶねなりけり」●奥管絃四後白鳥「かつら川に行て鵜船にのせ申て、こつ河くだて」●俳諧川柳「三仲夏おのてやかたて悲き鵜舟銭か色葉」

うぶはに「名」赤子が生まれてはじめてする黄ん。かにくそ。かにくそ。かにくそ。重訂本草綱目啓蒙四八人小兒胎尿、かにくそ。かにくそ。うぶはに「対州」。

因園山口泉大風77

うぶふ「感動」おさえていた笑いが思わず出るととき

うぶみず「えび」滑稽木七個人五・中「や飛さんと野野さんちやアねへか、ウツフフ」・故旧忘れ得べき高見順一〇小関は領いて、ウツフと独り笑みひけるとなり 因園琉球82

うぶめ「産女・産婦」名 ①妊娠している女。妊婦。また、出産してまだ産婦さんじやないにある女。産婦。十巻本と名抄「一産婦」食療經云産婦不可食梨子「八産婦和名手布女」・今昔二七二五「産女、南山科に行きて鬼にあひて」・観音院本名義披梨子「八産婦ウヰメ・俳諧・桃青三百韻付両吟二君二」ここににも「二布ふなりけり」下紅葉「信章」契り「秋は産妻ウヰメ」なりけり「芭蕉」二（「姑獲鳥島因園」）とも難産で死んだ女が化したという幽霊。また、相像上の怪鳥。血みどろの姿で産児を抱かせようとしたり、幼児に似た泣き声で夜間飛来して幼児に危害を加えようとするといわれる。うぶめどり。うぐめ。今昔二七四三「此の産女云ふは、狐のひでとて死んでと云ふも有り、亦女の子産む」とで死んで霊に成ると云ふも有りとなむ「一日」葡辞書「Bumeウヰメ」訳異教徒たちの考では「出産で死んだ女のおにに残った亡霊。シモではウヰメグメという・浮世草子「好色五人女」三「是かや聞伝へし孕女ウヰメ」なるべし」と氣を留めて見しうらちに「重訂本草綱目啓蒙四五林禽「姑獲鳥うぶめどり」略中国にてはうぶめと云ふも、夜中飛行して小児を害すると云ふは小児を外に出さず。此鳥の鳴声兒の啼が如しと云 因園今迄平安●●●余仁（因園）色草名義義鳥類

うぶめ「産目」名 新生児がかかる風眼ふうがんに

うぶめし「産飯」名 出産の前後に、産児、または産婦のために用意する飯。碗に高く盛り上げ、小石を添えたりする。因園①出産直後に祝う飯。長野県諏訪上伊那郡53「香川県三豊郡04「山口県豊浦郡79②赤子の誕生三日目に産の神に供える飯。愛媛県温泉郡神和04

うぶめとり「姑獲鳥」名「うぶめ（産女②）に同じし

うぶめし「産餅」名 嫁が嫁家を出産したとき、嫁の里から持ってきた餅。嫁が嫁家を出産したとき、嫁の

は、産見舞に來た人に食べさせたり配つたりする。近畿から東海地方にかけていう。

うぶや〔産屋〕(名) ①出産のけがれを忌み、産婦を隔離するために別に建てる家屋。現在でも、共同の小屋に別居する例が残っている地方がある。産所。●書紀神代下(水戸本訓)「請ふ、我が為に産屋(ウブヤ)を造りて待たたまへ」。●書紀仁徳元年正月(前田本訓)「復、昨日(きねふ)臣(やつ)かれが妻産(こ)む時に當りて鵜飼(ささぎ)産屋(ウブヤ)に入(こ)びいれり」。②出産するようにしつらえた部屋。産室。●宇津保藏開上「うぶ屋のまうけ、白き綾、御調度もの、しろがねにし(か)して」。●枕二五「すまじきもの、ちこ亡くなりたるうぶ屋」。●今鏡「一子日中宮御産ときえさせ給ひて、姫宮うみ奉らせ給ふ。左兵衛督兼隆ときえ給ひしが家をぞ御うぶやにせさせ給へり」。③「うぶやしない(産養)①」に同じ。●伊勢物語七九「むかし、氏のなかにみこまされ給へりけり。御うぶやに人々歌よみけり」。●宇津保藏開上「女一の宮の御うぶ屋の残り物とてたまへるぞや」。●拾遺賀二六六「詞書、贈皇后宮の御うぶやの七夜に」。●關西ウマヤの転。またウフキヤ(鶴茸屋)の意名語記。●關西金多オビヤ(飛騨)オボヤ〔山形小国〕倫之回(余分) 〔關西〕文明伊賀明徳天皇、神皇正統記、黒本、書。

うぶやの 蘇(くせ)は八十(はちじゅう)までならぬ。幼いときに身についた性癖は一生つきまとうから、幼児のしつけが大事だということ。産屋の風邪(かぜ)は一生つ。三つ子の魂百まで。●浮世草子・當世が身の上・三「只とかく親の教が最初也。誠に産家ウブヤの曲(たせ)は八十まで直らぬものといへり」。

うぶやの 騒(さわ)き 出産の慶事、出産のさわぎ。●枕二五「すまじきもの、婿取りして四五年までうぶ屋のさわぎせぬ所も、いとすまじ」。

うぶやの 運(う)むしういまだ乾(かわ)かず 生まれてまだあまり時がたつていない。生まれて日が浅い。●太平記「一三北山殿謀叛事(生産(ウブヤ)の産未だ乾(かわ)かずに、中の院の中持定平のもとより使をもつて」。

うぶやあき〔産屋明〕(名) 産婦が産の忌を終わって平常の生活に戻るとき。また、そのときの祝い。赤子の宮詣りと混同することが多い。三〇日前後または二一日目などに行なうのが一般。うぶあけ。うぶあけ。●雑俳・広原海「二・産屋明迄は手と目を口の役」。●關西金多オボヤアキ(笑城)オボヤアキ〔山形小国〕オボヤキ・山形小国・千葉。

うぶやしない：やしなひ(産養)〔名〕 ①中古、貴族の家など子供が生まれると、初夜、三日目、五日目、七日目、九日目に、親族や関係者が産婦の衣服や子供の襦袢(むつぎ)、屯食(とんじき)握り飯(むしめ)などの飲食物

や器具その他を贈って祝意を表し、賀宴を開くこと。また、そのときの贈り物。今日でも民間で行なわれ、嫁の里親類などが、飲食物や着物などを贈る。産立(うぶたち)うぶたて。産屋(うぶや)お七夜。●宇津保藏開上「御うぶやしなひの三日の夜は左大將殿し給。略五日のう、あるじの大將おななくいかめしうし給へり。略七日になりて女御ききこえ給ふ。源氏葵(き)こたか、かむたかめ、残るなきうぶやしなひもの、めづらかにいかめしき、夜ごにう見のしひど。●栄花 様々(よう)のうこめたきをんなきみ生れ給ひぬ。略三日の夜は本家、五日の夜は摂政殿より、七日の夜は後の宮よりと、さまざまみじき御うぶやしなひなり」。②養ひ育てること。●読本 様説弓張月(統四四回)「王限りなく飲びて産育(ウブヤシナ)と等閑(なほざり)ならず」。●關西①出產から七夜まで、里、または親類から米をもらうこと。愛媛県西宇和郡喜喜村須川04②出產見舞。長野県下田郡533愛知県北設楽郡振草570(おきやしない)岐阜県加茂郡黒川042 關西金多オビヤシナイ(岐阜・飛騨)オボヤシナイ(岐阜) 倫之回(余分) 文明書。

うぶやそぞく：サウツク〔産屋装束〕(名) 産屋にいるときに着る白装束。産屋ですべて白色を用いる習わしとなっていた。●宇津保藏開上「母屋(もや)の御簾(みす)の内にぞうぶ屋さうぞくしたるしうとどもの多く居たる」。

うぶやだちいわい：いは〔産屋立祝〕(名) 産後一か月目ごろ、産婦が産の忌を終え、産屋から離れるときの祝い。

うぶゆ〔産湯〕(名) 出産直後、産婆などが新生児を入浴させて洗うこと。また、その湯。うぶゆ。●小右記寛和元年四月二八日「寅時降誕女子、巳時以鴨川水用産湯、酉時始沐」。●名語記十六「水を取て御うぶ湯にめされけり」。●日葡辞書「bunya(ウブヤ)」。●滑稽本・東海道中膝栗毛三「上さきやといふから金の鯨(し)やあはれ男だ。をにらんで、産湯(ウブヤ)から水道の水をあげた男だ」。●關西金多オボヤ(岐阜)オボユ〔信州上田・岐阜〕オボユ〔八丈島〕 倫之回(余分) 文明書。

うぶゆ(産湯) 著名人が産湯に使ったという伝承をもつ井戸や泉水。またその伝説。金王丸金時、菅原真直などのものが伝えられている。

うぶゆだらひ：だらひ〔産湯湯〕(名) 生まれた赤子の産湯に用いる湯。●關西金多オボヤ

うぶりつ〔有部律〕(名) 説一切有部せついつさいうぶの律。十調律てうじゅりつ。●釈并開録「本朝無有部戒壇、有部律者、聞南部戒壇、内經説、而延延唐符、欲強於彼彼、受戒、六統許之耶、否耶」。

うぶんかきゅう：クヤン〔宇文化反〕 中国隋の武帝。

隋末の混乱のさい、煬帝(ようだい)とその子浩を殺して帝位につき、国を許と号したが、竇建德(とうけんとく)に攻められて敗死した。六一九年没。

うぶんたい〔宇文泰〕 中国西魏の宰相、孝武帝に頼られ、東魏の高歓と抗争。官制を定め、また梁を攻めて、北周の打撃を与えるなど、その子暉が建てた北周の基礎を築いた。(五〇五—五五五)

うぶんばく〔烏文木〕(名) 植物こくたん黒檀(くろたん)の異名。●關西金多

うべ〔郁子〕(名) 植物むべ(郁子)に同じ。●季・秋。●本草和名「郁根、一名鬱子、略、和名宇倍」。●延喜式「三三六、諸国貢進菓子、略、近江国、郁子二奥籠」。●語記十五「あびにたる物をうべとなづく、如何ううべは郁子とかけり、むべとかく歟」。●因①如べ。高知県安芸郡802(うべかずら)高知県香美郡802②むべの実。伊豆三宅島308 關西金多(名語記、和訓栞大言海)。●關西金多

うべ〔宇部〕 山口県西部の地名。周防灘に臨む鉱工業都市。宇部炭田の石炭採掘とともに発展。大正一〇年(一九二一)市制。●關西金多

うべ〔宜〕〔副〕 (平安以降には普通「むべ」とも表記された) あとに述べる事柄を当然だと肯定したり、満足して得心したりする意を表わす。なるほど。まことに。もともと。もともと。●万葉六「三七、今つくる久邇の都は山河のさやけ見れば宇倍(うべ)知らすらし大伴家持」。●古今秋下二四九「吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風を風として世をわく屋屋康秀」。●宇津保俊隆「とくうちをて世をを経はるになどかあらむ。うべ、恋ひ給はんや」。●源氏紅葉「あやしの事どもおやりちてみだる人はむべをこまき事は多からむ」。●關西(昔二三四)兄の主、うべ願き給はぬ也けり。●關西(昔二三四)兄の主、うべ願き給はぬ也けり。●本朝辞源「宇田甘賀」。●(2)うべ(得)の義。肯(うけ)得べき理(ことわり)の意。大言海。●(3)大の意のウを動詞(ベシ)の語幹(ベ)に松岡静雄。●大いに然りという意(日本古語大辞典の松岡静雄)。●關西金多(今史平安) 倫之回(余分) 文明書。

うべこ(産湯) 著名人が産湯に使ったという伝承をもつ井戸や泉水。またその伝説。金王丸金時、菅原真直などのものが伝えられている。

うべこ(産湯) 著名人が産湯に使ったという伝承をもつ井戸や泉水。またその伝説。金王丸金時、菅原真直などのものが伝えられている。

うべこ(産湯) 著名人が産湯に使ったという伝承をもつ井戸や泉水。またその伝説。金王丸金時、菅原真直などのものが伝えられている。

うべこ(産湯) 著名人が産湯に使ったという伝承をもつ井戸や泉水。またその伝説。金王丸金時、菅原真直などのものが伝えられている。

うべこ(産湯) 著名人が産湯に使ったという伝承をもつ井戸や泉水。またその伝説。金王丸金時、菅原真直などのものが伝えられている。

うべこ(産湯) 著名人が産湯に使ったという伝承をもつ井戸や泉水。またその伝説。金王丸金時、菅原真直などのものが伝えられている。

うべこ(産湯) 著名人が産湯に使ったという伝承をもつ井戸や泉水。またその伝説。金王丸金時、菅原真直などのものが伝えられている。

うべこ(産湯) 著名人が産湯に使ったという伝承をもつ井戸や泉水。またその伝説。金王丸金時、菅原真直などのものが伝えられている。

うべこ(産湯) 著名人が産湯に使ったという伝承をもつ井戸や泉水。またその伝説。金王丸金時、菅原真直などのものが伝えられている。

うべこ(産湯) 著名人が産湯に使ったという伝承をもつ井戸や泉水。またその伝説。金王丸金時、菅原真直などのものが伝えられている。

うべこ(産湯) 著名人が産湯に使ったという伝承をもつ井戸や泉水。またその伝説。金王丸金時、菅原真直などのものが伝えられている。

うべこ(産湯) 著名人が産湯に使ったという伝承をもつ井戸や泉水。またその伝説。金王丸金時、菅原真直などのものが伝えられている。

うべこ(産湯) 著名人が産湯に使ったという伝承をもつ井戸や泉水。またその伝説。金王丸金時、菅原真直などのものが伝えられている。

うべこ(産湯) 著名人が産湯に使ったという伝承をもつ井戸や泉水。またその伝説。金王丸金時、菅原真直などのものが伝えられている。

うべこ(産湯) 著名人が産湯に使ったという伝承をもつ井戸や泉水。またその伝説。金王丸金時、菅原真直などのものが伝えられている。

うべこ(産湯) 著名人が産湯に使ったという伝承をもつ井戸や泉水。またその伝説。金王丸金時、菅原真直などのものが伝えられている。

うべこ(産湯) 著名人が産湯に使ったという伝承をもつ井戸や泉水。またその伝説。金王丸金時、菅原真直などのものが伝えられている。

うべこ(産湯) 著名人が産湯に使ったという伝承をもつ井戸や泉水。またその伝説。金王丸金時、菅原真直などのものが伝えられている。

うべこ(産湯) 著名人が産湯に使ったという伝承をもつ井戸や泉水。またその伝説。金王丸金時、菅原真直などのものが伝えられている。

うべこ(産湯) 著名人が産湯に使ったという伝承をもつ井戸や泉水。またその伝説。金王丸金時、菅原真直などのものが伝えられている。

うべこ(産湯) 著名人が産湯に使ったという伝承をもつ井戸や泉水。またその伝説。金王丸金時、菅原真直などのものが伝えられている。

うべこ(産湯) 著名人が産湯に使ったという伝承をもつ井戸や泉水。またその伝説。金王丸金時、菅原真直などのものが伝えられている。

うべこ(産湯) 著名人が産湯に使ったという伝承をもつ井戸や泉水。またその伝説。金王丸金時、菅原真直などのものが伝えられている。

うべこ(産湯) 著名人が産湯に使ったという伝承をもつ井戸や泉水。またその伝説。金王丸金時、菅原真直などのものが伝えられている。

うべこ(産湯) 著名人が産湯に使ったという伝承をもつ井戸や泉水。またその伝説。金王丸金時、菅原真直などのものが伝えられている。

うべこ(産湯) 著名人が産湯に使ったという伝承をもつ井戸や泉水。またその伝説。金王丸金時、菅原真直などのものが伝えられている。

うべこ(産湯) 著名人が産湯に使ったという伝承をもつ井戸や泉水。またその伝説。金王丸金時、菅原真直などのものが伝えられている。

うべこ(産湯) 著名人が産湯に使ったという伝承をもつ井戸や泉水。またその伝説。金王丸金時、菅原真直などのものが伝えられている。

うべこ(産湯) 著名人が産湯に使ったという伝承をもつ井戸や泉水。またその伝説。金王丸金時、菅原真直などのものが伝えられている。

うべこ(産湯) 著名人が産湯に使ったという伝承をもつ井戸や泉水。またその伝説。金王丸金時、菅原真直などのものが伝えられている。

いたもの) なるほど道理であることよ。もともとだ。なほ。と。だ。な。●書紀推古一〇年正月、歌謡「宇倍之詞度(ウベシカモ)」。蘇我の子らを、大君の使はすらしき。

うべしこそ (うべし) に指示の係助詞「こそ」の付いたもの。肯定、得心する気持ちを強めていう。●古事記下「歌謡、高亮(たかあきら)の日の御子みこ」宇倍志許(ウベシカモ)問ひ給へ(真(ま)こそ)に問ひ給へ」。●万葉一九四一七「夜くたちて鳴く川、鳥宇倍之許(ウベシカモ)昔の人もしひ来にけれ大伴家持」。●良寛歌「うべしこそ鹿ぞ啼くなるあしひきの山ののみちは色づきにけり」。

うべしもの (うべし) に強意の係助詞「もの」の付いたもの。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

うべな (うべな) に係助詞「な」の付いたもの。同意肯定の意を表わす。なるほど。●万葉一〇九「一辺尼(ひとへに)ニ「金銭の名の心は、決して二辺尼の心に及ぶ能はず」と、言へること宜(うべ)なるかな」。

与ふ(当)ふ(し) 大慈恩寺・藏法師伝(永久四年)送
 了五峰を過ぎむ 観智院本名義抄可ムベナフ
 ・読本・権説引張月後二〇回「王上みかど驚きま
 し給ひ、茂光もちみづが申す旨を語(う)べな
 せ給ひ」・落梅集島崎藤村「利根川だより二」せ
 ては雨戸一枚なりとも明けよと所望したるに、心地
 ようくうべなひぬ ②(目・四) ①服従する。配下
 となる。書紀神代下(水戸書本)其の不服ウベナ
 む ①ぬもののは、唯星の神香香貫かかせをの
 み ②書紀・敏達即位前北野本訓「是に神八井耳命
 懣然(はちて)自服ウベナヒぬ ②犯した罪に對
 して謝罪するをわびる。書紀・景行五十六年八月北野
 本訓「時に蝦夷(えみし)の首領(ひと)のみてかみ足
 辺大羽振辺・遠津間男辺等頭(かしら)のこゝろ
 て頓首(かみ)をかむ。受服(ウベナヒて)尽(ふ)く
 の地(ところ)を獻(たま)へてまつる」。書紀・繼體二
 年九月(國書本訓)陛下、國命(おほむこと)を成し
 て朝に入(まゐりて)謝罪(う)ベナヒまじうさむを待
 ちたまへ ④南宮文房ノとも 魯之田 ⑤余之
 ⑥(讀)書傳を義
 ⑦(讀)書傳を義
 ⑧(讀)書傳を義
 ⑨(讀)書傳を義
 ⑩(讀)書傳を義
 ⑪(讀)書傳を義
 ⑫(讀)書傳を義
 ⑬(讀)書傳を義
 ⑭(讀)書傳を義
 ⑮(讀)書傳を義
 ⑯(讀)書傳を義
 ⑰(讀)書傳を義
 ⑱(讀)書傳を義
 ⑲(讀)書傳を義
 ⑳(讀)書傳を義
 ㉑(讀)書傳を義
 ㉒(讀)書傳を義
 ㉓(讀)書傳を義
 ㉔(讀)書傳を義
 ㉕(讀)書傳を義
 ㉖(讀)書傳を義
 ㉗(讀)書傳を義
 ㉘(讀)書傳を義
 ㉙(讀)書傳を義
 ㉚(讀)書傳を義
 ㉛(讀)書傳を義
 ㉜(讀)書傳を義
 ㉝(讀)書傳を義
 ㉞(讀)書傳を義
 ㉟(讀)書傳を義
 ㊱(讀)書傳を義
 ㊲(讀)書傳を義
 ㊳(讀)書傳を義
 ㊴(讀)書傳を義
 ㊵(讀)書傳を義
 ㊶(讀)書傳を義
 ㊷(讀)書傳を義
 ㊸(讀)書傳を義
 ㊹(讀)書傳を義
 ㊺(讀)書傳を義
 ㊻(讀)書傳を義
 ㊼(讀)書傳を義
 ㊽(讀)書傳を義
 ㊾(讀)書傳を義
 ㊿(讀)書傳を義

左弁官之事。右管領司事。右弁官遣之。訴訟所爲。左京職事。左弁官受推。即付刑部。右京職事。右弁官受推。亦付刑部。凡出納藏物者。左弁官。宣中務。出納訖。大藏省録受納物數。申右弁官。一也。延喜式。一。太政官申弁官課少納言者。左弁官。右弁官。准此。某司官申送調帳及中男物等帳若干。うべんかなく。ウベツクワン。右弁官局。云々。右弁官のつかさどる職務に関する文書の起草、出納、保管などを行ふた所。

うほ 萬年一名 ①（中国の夏の禹王が、治水のため天下をめぐった結果、ついにびこになったといふ伝説による）禹王の特殊な歩き方。荷子注引戸子非相禹之勞十年、不窺其家、手不爪、脛不毛、偏枯之病、歩不相過、人曰禹步。②（古いやまのときに、巫者ふしに、わねたところから足を進めるときに、一方の足を他方の足よりも前に出さない歩き方。わが国では、貴人の外出時、邪氣を退くために陰陽家が呪文でゆを唱えて千鳥足で歩くのに従って歩くもの。反問へんばい）。勅使陰陽家所行也。又謂之禹歩（うほ）也。③病氣で足の自由のきかない人。わらんべ草。二足なべ草。うほの者は、禹歩と名づく。④大まかで歩くこと。

園田會之図 園田下学文明集本

うほう ①ハハ 右方一名 ①右の方。みがわ。左左方。②うほう右方の方の姿の略。歌舞品目五上「右楽」又右方に用ふる楽の義にして即舶楽の総称なり。園田ウホー 雅楽の中心で、輸入音楽のうち、古代中国系を左方の楽というののに対して、古代朝鮮系の方をいいう。別に地名から、前者を唐楽（とうがく）、後者を高麗楽（こまがく）といふもよい、楽器構成や曲風が違ふ。また、舞楽を左方と右方に分け、左舞（さまい）、右舞（うまい）という普通、右方の楽は舞楽として奏され、管絃というば、あいは、左方の楽に限られる。左方の楽うほうの舞（まい）。「うまい（右舞）に同じ。左方の舞

うほう ①右輔（ま）（ゆはは（右輔）の変化したものをいう。天子の補佐をする臣を左右に分け、その右方という。うほう「羽佐（ま）きき」の羽と施生ほうきゅうの尾とを、さおの先に飾りつけた輔はたほこ。浄瑠璃、唐船新国性命土「清道せいだうの大旗羽聞三車馬の音見羽施之美」

うほう「羽帽（ま）羽根飾りのついた帽子。歌劇「オーストを聴く（記）永井荷風、われ此にありへ略剣を腰に、羽帽（ま）を頭に、美しき衣を肩にか

け」 園田ウホー 園之図

うほう（鳥鵬）^{（一）}隠者がかぶる黒い帽子。またそれをもくする隠者や紳士をさす。・翰林胡蘆集四・賛人丸・黃塵海裡脫烏帽・明石石行九説聞・林羅山詩集冬日書懷・自是東西南北人・何時烏帽還・紅塵に・杜申相逢歌贈歐二別駕詩「烏帽如塵・蒼衣・將炙餅兼衣」^{（二）}えほし。十卷本和名抄・四・烏帽子付・兼名苑・云帽一名頭衣・八卷書・烏帽子俗詔鳥為焉・日本外史一・源氏前記・重盛烏帽直衣而入。^{（三）}（國語文庫）

うほうこくウバウ（鳥卯国）（鳥は太陽、卯は東方の意）古く、中国人が呼んだという日本国の異称。・和爾雅一・上・烏卯（ウバウ）国・華人称日本曰烏卯・言烏日也・卯東也、見于善無畏碑一

うほうきつ（右輔左子）（輔、弱ともに補佐の意）左右につて天子を補佐すること。また、その臣。左輔右弼。・淨瑠璃・芳野の内裡十五・両やう争ふうまのかたは、うほうさひつての両金剛こんがう、ううまのかたは、忿怒（ふんぬ）の勢（せい）い

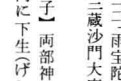
うほうだらにいきよう（キウ（雨宝陀羅尼經・經名。一卷。唐の不空（ふくう）訳。貧者を富裕にさせるために、妙月という長者が如來から陀羅尼を授かり、その呪文（じもん）の力を財宝を雨ふらすことができた）ところから、この經名がある。・諸阿闍梨真言密教部類總錄・上・雨宝陀羅尼經一卷、内加弘説両子不空訳・元新入目録・海仁覺・怪談牡丹燈籠・三遊亭月朝・八・天れから又爰にある雨宝陀羅尼經うほうダラニキウ）うほうお経を遺るから説讀した）

・貞元新定釈教目録・二・雨宝陀羅尼經一卷、經内題・加弘説字・大興善寺・藏沙門大広智不空奉詔訳、貞元新入目録

うほうとうじ（雨宝童子） 両部神道（りょうぶしんとう）で天照大神が日向に下生（げしょう）した時の姿という。右手を金剛宝棒に支え左手に宝珠を持ち、頭上に五輪塔をいだく童子の像。・淨瑠璃・曾我権山上・十四日の本照らすたけの御神も雨宝（うほう）の御名はあまねき天の下。^{（四）}（國語文庫）

うほうば（鵬）（とを伴う場合もある。「うほうろば」とも）水面に物が浮かび漂（う）く。うほうろば（とも）・西落本・風金箱・鵬之浮水也・汎汎うボウボ（任）去来風（い）・雜俳・類字折句集・天水にうほうば如來火吹竹・歌舞伎色一座梅椿二幕・アレアレ、うほうばと浮いて居ります。うっぽば。うっぽばないでうかれて居ります。うっぽば。うっぽば。

・西落本・風金箱・使彼探花子（うてんつ）をして・涸涸（ウボウボ）なり。・淨瑠璃・双蝶舞曲輪日記六（よ）い客が付過ぎて、与五郎殿をようあんなんうほうばに



雨宝童子
（仏教図象）



大坂の色咄、いづれの者も馬があふて、今迄欠伸(あくび)したる人々、一所(ひとところ)とこ(こ)へ(へ)一(ひと)なり(なり)と(と)寄(よ)りて、*浄瑠璃、寿の門松(かど)と(と)小(こ)身(み)に(に)成(なり)成(なり)共(とも)侍(さむらい)せむらひに縁(ゆかり)組(くみ)たい。何(なん)んぼうぶげ(ぶ)者(もの)金(かね)持(も)て、町(まち)人(ひと)とは馬(うま)があふま(あ)ふ。*黄表紙(わうはふし)、僧口返答(そうこうたう)二十年(にじゅうねん)は二(に)昔(むかし)、年寄(としより)と若(わかし)い者は馬(うま)ウ(ウ)マ(マ)があはぬと云(い)ふは合(あ)合(あ)の行(な)かぬ事(こと)。
[因園(いんえん)のまがアウ(ウ)鳥(とり)根(ね)]

うまが「太(た)敷(しき)たいこ」打(う)つてんてん打(う)つ」発情(はつせい)した牡馬(おしうま)が伸(の)びた陰茎(いんせい)を自(みづか)身の腹(はら)に打(うち)ち当(あた)る。*浄瑠璃(じやうるり)、雪女(ゆきむすめ)五枚羽子板(ごまいはし)中(ちゆう)「恋(こひ)から生(な)れた人間(にんげん)万(ばん)事(じ)、塞翁(さいおう)が馬(うま)のう(う)つたたいこの撥(は)ち」*浄瑠璃(じやうるり)、雪女(ゆきむすめ)五枚羽子板(ごまいはし)中(ちゆう)「ア、馬(うま)がでんでんう(う)つは(は)い。アアこ(こ)は(は)や」。

うまがきよく(「だき」は、手を働(はたら)かせて事をなす意(い)の動詞(どうし)「たぐ」の変化(へんか)したも(も)の)馬(うま)の手綱(てなづな)をたぐ(たぐ)つてゆく。*万葉(まふ)一(いち)九(じゅう)四(よ)四(よ)「秋(あき)つけば、萩(はぎ)咲(さ)きにはほ(ほ)石(いし)蘭(らん)に馬(うま)太(た)伎(ぎ)由(ゆ)吉(きち)う(う)まダキユ(ダキユ)で(で)を(を)ちこ(こ)に鳥(とり)踏(ふ)み立(た)て大(だい)伴(ばん)家(け)持(も)」。

うまと(猿(さる)) 仲(な)のよいこと(こと)のた(た)え。*雑俳(ざつはい)、川柳(かわりゅう)評(ひやう)万(ばん)句(く)宝(たから)暦(れき)一(いち)〇(じゅう)「う(う)まきと(と)嫁(よめ)と(と)姑(ぢやう)がむ(む)たさる(さる)」[因園(いんえん)は馬(うま)屋(や)の守(まも)り、正月(しょうげつ)のう(う)まき祭(まつり)には猿(さる)の給(たま)馬(うま)が用(もち)いられた」。

うまに(経文(きやうもん))きようもん「う(う)ま(馬(うま))の耳(みみ)に(に)念(ねん)仏(ぶつ)ね(ね)ん(に)同(どう)じ。*滑(くわ)稽(き)本(ほん)「酩酊(めいとう)気(き)質(しつ)下(げ)「お(お)手(て)に取(と)って御(ご)覧(らん)じ。*略(りやく)こ(こ)ぶし切(き)つてはな(は)さ(は)ぬ馬(うま)に経文(きやうもん)牛(うし)の耳(みみ)に風(かぜ)」。

うまに(銭(ぜに)) 価値(かち)のあるも(も)のでも、持(も)つ人(ひと)い(い)かんによ(よ)つては何(なん)の役(やく)にも立(た)たないこと(こと)のた(た)え。猫(ねこ)に小判(せうばん)。

うまに(乗(のり)) (馬(うま))は月経帯(げつきたい)の隠語(おぼえ)月経帯(げつきたい)をつ(つ)ける。月経(げつき)になる。*雑俳(ざつはい)・柳多留(りゅうたろう)一(いち)二(に)「そこを(を)お(お)さ(さ)へて女馬(めうま)に(に)い(い)ろ。*雑俳(ざつはい)・柳多留(りゅうたろう)留(りゅう)遣(しん)巻(ま)八(はち)下(げ)「女房(にようぼう)はたんへきに(に)乗(のり)れ(れ)「速(すみ)い馬(うま)に(に)乗(のり)る前(まへ)のろい牛(うし)に(に)乗(のり)て慣(な)れる必要(ひつやう)がある意(い)から」。

高い地位(たいてい)につくは、その前(まへ)に低い地位(たいてい)に(に)あ(あ)つて努(つと)めなくてはなら(な)ない。*虎明本(こめいほん)狂言(きやうげん)・入間川(いりまがわ)み(み)どもが大名(だいみょう)にな(な)ったば、なんち(なんぢ)を(を)は馬(うま)に(に)のせうぞ。のりつるま(ま)は牛(うし)に(に)のせう。*俳諧(はいかい)・毛吹草(けふきくさ)一(いち)「む(む)まに(に)のるま(ま)では牛(うし)に(に)のれ」*浄瑠璃(じやうるり)・孕常盤(なつとこ)「を(を)のれは馬(うま)屋(や)を得(え)たるとや。当分(たうぶん)それ(それ)はいらぬこと(こと)。

馬(うま)に乗(のり)る者(もの)が草履(ぞうり)直(ただ)な(な)せ」。

うまに(乗(のり)) 乗(のり)る者(もの)は落馬(らくま)の心配(しんぱい)があり、徒歩(たふそ)で行(い)けば転(ころ)ぶおそれがある、とい(い)うところ(ところ)から、何(なん)かものこ(こ)をしよう(しよう)とすれば、多少(たうしょう)の危険(きけん)は常に伴(とも)うものである意(い)。「曾我物語(そがものがたり)七(しち)勘当(かんだう)中(ちゆう)

る事(こと)「馬(うま)に(に)のる物(もの)はおち、みちゆくも(も)のはたふ(はたふ)る。みな人(ひと)のこと(こと)也(なり)。これ(これ)はとて、とどまり候(こう)は(は)んには道(みち)ゆく者(もの)候(こう)は(は)」。

うまに(乗(のり)) 乗(のり)てみよ、人(ひと)ひとには添(そ)うてみよ馬(うま)のよ(よ)しあしは実(じつ)際(さい)に乗(のり)てみ(み)な(な)く(く)てはわ(わ)からず、人(ひと)のよ(よ)しあしはも(も)いっしょに暮(く)らしてみ(み)な(な)ければ本(ほん)当(どう)のところ(ところ)はわ(わ)からぬ。何(なん)事(こと)も自(みづか)身(み)で直(ただ)接(せつ)確(かく)めてみよ、の意(い)。「雲形本(うんがた)狂言(きやうげん)・繩(な)綱(なづな)惣(そう)そ(そ)う(う)じて先(ま)づ」人(ひと)ひとにはそ(そ)うて見(み)よ、馬(うま)ウ(ウ)マ(マ)に(に)は乗(のり)てみよとやら申(まを)すが、あ(あ)の誰(たれ)殿(だん)を日(ひ)比(ひ)より人(ひと)ぢや(ぢや)みよと思(おも)ふて居(ゐ)ま(ま)し

が、アア思(おも)ふたより(より)は人(ひと)づかひ(づかひ)のわるい人(ひと)でござ(ござ)る。*俳諧(はいかい)・毛吹草(けふきくさ)一(いち)「む(む)まに(に)のりてみよ人(ひと)にはそ(そ)うて見(み)よ、人(ひと)情(じやう)本(ほん)・花(はな)簪(ざん)一(いち)〇(じゅう)回(かい)「馬(うま)に(に)は乗(のり)て味(あじ)くらあ(あ)ち(ち)を見(み)よいふ事(こと)のあるなれば、思(おも)ひの外(ほか)の事(こと)もあら(あら)な(な)か」。

うまの(麻衣(あさぎぬ)) ①引馬(ひきうま) (ひきうま)にま(ま)とう粗末(そまつ)な布(ぬい)。②馬(うま)の被服(ふく)に用(もち)いる粗(あら)い植物纖維(しょくぶつせんい)の織物(おりもの)で仕立(しだて)た上(うへ)着(き)う(う)まぎ。網衣(あみぎぬ)。*男袈(おんが)三(さん)郎(らう)絵(え)詞(し)・信濃(しんのう)のてうたい、馬(うま)のあさぎぬ、といふも(も)のあさぎぬ(ぎぬ)なるをき(き)せてた(た)ま(ま)つて

うまの(足(あし)) 芝居(しばい)で使(つか)う張(はり)子(こ)の馬(うま)の中(ちゆう)にはい(い)って脚(きゃく)役(やく)をする者(もの)だ、その役(やく)が端(は)役(やく)であるところ(ところ)から、下級(げきゅう)の役者(やくしや)をあ(あ)ざけつてい(い)うのにも用(もち)いる。馬役者(うまやくしや)。*雑俳(ざつはい)・川柳(かわりゅう)柳二(りゅうに)「居(ゐ)房(ぼう)屋(や) (すあぶら)を焚(たき)きかけ馬(うま)の足(あし)に出(で)る」。片恋(かへん)芥川(かいかわ)龍之介(りゆうのけい)「お徳(おとく)の惚(おぼ)れた男(おとこ)と云(い)ふは、役者(やくしや)でね(ね)」。*略(りやく)かう云(い)ふと、君(きみ)は宮戸座(みやとざ)常盤座(とこばん)の馬(うま)の足(あし)だと

思(おも)ふだらう。[因園(いんえん)ウ(ウ)マノアシ(アシ)會(かい)合(ごう)金(きん)受(う)図(ず)]

うまの(頭(あたま)) (あたま)で鳴(な)き声(こゑ)の「ん」に、あ(あ)たま(たま)でず(ず)頭(あたま)を(を)表(あらわ)し、思(おも)ひがけ(け)な(な)か(な)たしや(しや)れ。「ひんず(ひんず)は不測(ふそく)の意(い)思(おも)ひがけ(け)ないこと(こと)をい(い)う。当世(たうせい)里(り)す(す)こ(こ)は馬(うま)のあたま(たま)で、ひんず(ひんず)じや」。

うまの(後足(あとあし)) (歌舞伎(かぶき)の馬(うま)の足(あし)はつま(つま)らない役(やく)であるか、とりわけ、その後足(あとあし)はさ(さ)ないところ(ところ)から) 最も(たし)つま(つま)らない役(やく)。*談義本(だんぎほん)・古朽(こく)木(き)一(いち)「大蛇(おほいづな)の役(やく)は座元(ざげん)の乗(のり)れた馬(うま)の蹄足(ていそく)(アトアト)の少(す)し手(て)のよきも(も)にて、国姓爺(こくせいぢや)の虎(こ)ほどの仕打(しうち)もな(な)く」。

うまの(狭い(せまい)かだ) 「う(う)まいかだ(馬(うま)後(ご)①)に同(どう)じ。*今昔(こんせき)三(さん)・一(いち)「河(か)にははらと打(う)て入(い)りて渡(わた)けるに、千騎(せんき)は有(あ)むとそ見(み)えける。歩(あ)か(か)なる者(もの)共(とも)をば、馬(うま)に乗(のり)たる者(もの)共(とも)の番(ばん)え」に引(ひ)けつ引(ひ)けつつぞ渡(わた)ける。*略(りやく)早(はや)う馬(うま)の後(ご)と云(い)ふ事(こと)をして馬(うま)を游(あそ)びに渡(わた)ける也(なり)」。

うまの(軍(いくさ)) 騎馬(きば)の兵隊(へいたい)、騎兵(きへい)。う(う)まいくさ。*書紀(しよき)欽明(きんめい)一(いち)年(ねん)一(いち)二(に)月(げつ)(寛文(かんぶん)版(ばん)訓(くん)「進(すす)んで

弓(ゆみ)を臂(ひ)きて占(う)振(ふ)さ(さ)しま(ま)かなひて新羅(しら)の騎卒(きそ) (ム(ム)ノイクサ)の最(も)も勇壮(ゆうさう)者(もの)ひ(ひ)とを射落(しやく)す」。

うまの(長(なが)の奥(おく)) 「う(う)まお(お)馬(うま)長(なが)に同(どう)じ。枕(まくら)一(いち)八(はち)〇(じゅう)心(こゝろ)地(ぢ)よげな(な)るも(も)の御霊(ごりやう)会(かい)りやうゑのむ(む)まのをさ」。

うまの(尾(お)の鯛(たい)釣(たい)り) 玩具(おもちゃ)の一つ。小(こ)弓(ゆみ)に馬(うま)の尾(お)を弦(しん)と(と)し、その先(さき)に張(はり)子(こ)の鯛(たい)をつるし、踊(おど)りながら弦(しん)をく(く)だるよう(よう)に作(つく)ったもの(もの)。(遊遊笑(ゆうゆうせう)寛(かん))。*浮世草子(うきくさこ)世間胸算用(せけんちゆうさんよう)一(いち)二(に)「武具(ぶく)・馬具(ばく)年(ねん)久(く)しく売(う)れ空(くう)使(し)て、小刀(ことう)細(こ)に馬(うま)の尾(お)に

てしなけたる鯛(たい)釣(たい)りも(も)馬(うま)が龍(りゆう)抜け(ぬ)けの輕業(けいごう)をするの(の)は無理(むり)であるところ(ところ)から、無理(むり)を承知(しやうち)するこ(こ)のた(た)え。牛(うし)の龍(りゆう)抜け(ぬ)け。*談義本(だんぎほん)・當世(たうせい)下(げ)手(て)談(だん)義(ぎ)一(いち)「工藤(こうどう)祐経(ゆうけい)が靈(れい)堂(だう)言(ごん)伝(でん)し事(こと)「嬉(うれ)しさに

跡(あと)ふ返(かへ)り、思(おも)へば馬(うま)の龍(りゆう)カ(カ)ぬけとは我身(わがみ)の上(うへ)じやと一人(ひとり)お(お)か(か)し。*洒落本(しやれほん)・跡(あと)部(ぶ)人(ひと)伝(でん)「元日(げんじつ)より大晦(だいげき)日(にち)まで、月(つき)に華(は)に二(に)百(ひゃく)日(にち)程(ほど)は馬(うま)の龍(りゆう)カ(カ)ぬけする様(よう)に、伸(の)びつ(つ)屈(か)か(か)んづ(づ)其苦(くる)しき」。

うまの(頭(かしら)) も親見出(おやみで)し。別段(べつだん)の事(こと)を(を)一(いち)様(よう)に心得(こころえ)たる諭(ごん)。

うまの(印(いん)かね) 馬(うま)の産地(うぶぢ)や品位(しんゐ)を示(しめ)すためにそ(そ)の後足(あとあし)の毛(け)に押(お)す焼(や)き印(いん)、焼(や)き印(いん)の形(かたち)により、種々(しゆしゆ)の名称(めいせう)がある。かね。*雑俳(ざつはい)・柳多留(りゅうたろう)一(いち)「馬(うま)の金目(きんめ)に小袖(こそで)つと着(き)せ」。*隨筆(ずいひつ)・貞丈(ていぢやう)記(き)一(いち)「三(さん)馬(うま)の印(いん)カネ」と云(い)ふ事(こと)、旧記(きゅうき)にあり。馬(うま)のかねとよべし。馬(うま)のひも(ひも)もへ(へ)ひ(ひ)わ(わ)も(も)は馬(うま)のあ(あ)とあ(あ)し(し)の物(もの)事(こと)也(なり)略(りやく)√(√)や(や)きか(か)ねの印(いん)をお(お)す事(こと)也(なり)」。

うまの(髪(かみ)鉄(てつ)かみはさみ) 馬(うま)の毛(け)を切(き)るはさみ。*新撰字鏡(しんせんじきやう)・錦馬(きんば)乃(な)加美波佐美(かみはさみ) (因園(いんえん)字鏡(じきやう))

うまの(皮(かわ)) (馬(うま)の皮(かわ)を胴(どう)に張(はり)つて作(つく)るとこ(こ)ろから) 太鼓(たいこ)の異名(いみな)・*雑俳(ざつはい)・柳多留(りゅうたろう)六(む)五(ご)「馬(うま)の皮(かわ)たたくも牛(うし)の日(にち)の祭(まつり)」。

うまの(吉量(きちりやう)) 語義本(ごぎほん)・徒然草(てねんそう)一(いち)三五段(さんごだん)に難解(なんかい)なこ(こ)とばと出(で)てくるも(も)の。博識(はくしき)を誇る資(すけ)資(すけ)大(だい)納言(なつごん)がそ(そ)の意(い)を問(と)ねて答(こた)へに因(よ)るという話(はなし)の中(ちゆう)のことば。*諺苑(げん)「馬(うま)の吉量(きちりやう) (キリヤウ)狐(きつ)きつ(つ)の丘(かみ)四(よ)を(を)かなくばれ」。

人(ひと)の體説(たいせつ)によ(よ)つて致(いた)す吉量(きちりやう)は馬(うま)の名山海経(めいさんかい)に見(み)ゆ量古字(りやうこじ)に置(お)ける略(りやく)入(い)れんと(と)うは鼓(こ)のとうの如(ごと)く形(かたち)を云(い)ふは馬(うま)の背(せ)のたるみて鼓(こ)のとうのよう(よう)くびれたるを云(い)ふ「説きつりやうは喉嚨(のど)なり共に皆(みな)取(と)りてならず」。

うまの(きばね) 馬(うま)の下(した)あ(あ)ご。十卷本(じゆけん)和名抄(わななまがき)一(いち)七(しち)「食槽(じきそう) 李緒相馬(りじゆさう)経(きやう)食槽(じきそう)欲(よく)寛(かん)食槽(じきそう)馬(うま)乃(な)岐保(きほ)福(ふく)」。

*観智院本(くわんちゐんほん)義抄(ぎがき)抄「食槽(じきそう)ウ(ウ)マノキボネ(キボネ)牛(うし)

馬(うま)料(りやう) [因園(いんえん)和名(わな)系(けい)]

うまの(草(くさ)) 牛馬(うしうま)などの飼料(けりやう)にする草(くさ)。馬草(うまぐさ)。(まぐさ)。*高野山文書(たかのやまぶんしよ)「治元(ちげん)年(ねん)九(く)月(げつ)二(に)七(しち)日(にち)河上權四郎言上(かみかみけしやうごんじやう)上(うへ)野(の)山(さん)古(こ)文(ぶん)書(しよ)五(ご)一(いち)〇(じゅう)二(に)七(しち)「う(う)まのく(く)さも大(だい)事(じ)に候(こう)」。

うまの(草飼(くさかい)) (う(う)まのく(く)さがいとも) ①馬(うま)に草(くさ)を与(たま)へること。*平家(へいけ)七(しち)願書(がんしよ)馬(うま)の草(くさ)かひ水便(すゐべん)「すゐ(水)に共(とも)に上げな(な)り」。*平家(へいけ)八(はち)・妹尾(いせ)最期(さいき)「備中(びちゆう)の妹尾(いせ)は、馬(うま)の草飼(くさかい)所(ところ)に候(こう)」。②馬(うま)に若草(わかし)を食(く)はせる時節(ときせふ)すなわ(な)ち旧曆(きうれき)四(よ)月(げつ)こ(こ)ろ。*平家(へいけ)七(しち)・北(きた)国(こく)下(げ)向(むか)明(めい)年は馬(うま)の草(くさ)かひに付(つ)いて、軍(いくさ)あ(あ)るべしと披露(ひやう)せられたりければ、*源平盛衰(げんへいせいざい)記(き)一(いち)八(はち)・源氏(げんし)追討(おいうち)使(し)事(こと)「年(ねん)明(めい)けは馬(うま)の草(くさ)飼(かい)「サカ(さ)い」に付(つ)いて合戦(がせん)あ(あ)る」と相識(さうしき)せられたりければ、[因園(いんえん)「延喜式(えんぎしき)十(じゅう)八(はち)左右馬寮(さうぶりやうばりやう)に「毎年(まいねん)四月(しがつ)十一(じゅういち)日(にち)始(はじ)め青草(せいそう)十(じゅう)八(はち)日(にち)以後(いご)乾草(かんそう)こ(こ)ある」。

うまの(草飼所(くさかいどころ)) (う(う)まのく(く)さがいどころとも) 馬(うま)の飼料(けりやう)を得(え)るための領地(りやうぢ)。馬飼(うまかい)い所(ところ)。*曾我物語(そがものがたり)八(はち)・屋形(やしやう)ま(ま)はりの事(こと)「所給(しよきよ)はりて馬(うま)の草(くさ)かひどころを(を)したまへ」。

うまの(糞(くそ)) (う(う)まが似(に)似(に)馬糞(ばふん)に同(どう)じ。う(う)まの糞(くそ)「形(かたち)が似(に)似(に)てい(い)うところ(ところ)から) 束(たば)髪(かみ)をあ(あ)ざけつてい(い)う語(ご)。[因園(いんえん)ウ(ウ)マノクソ(クソ)會(かい)合(ごう)図(ず)]

うまの(口(くち)) ①馬(うま)の手綱(てなづな)馬(うま)のくちと(と)繩(じゆ)馬(うま)の口輪(くちりん)。*書紀(しよき)延喜(えんぎ)四年(しよねん)一(いち)月(げつ)前(まへ)本訓(ほんくん)一(いち)「鹿(か)の口(くち)を(を)驅(か)走(そう)し(し)て前(まへ)発(はつ)はなつこと(こと)を(を)相(あ)こ(こ)も辞(こと)ゆ(ゆ)びて替(か)ふな(な)つとを(を)並(なら)べて馳騁(ちしゆう)は(は)す」。*源氏(げんし)浮舟(うきふね)「この五位(ごい)二人(ふたり)人(ひと)御馬(ごま)の女(め)にぞさ(さ)ぶらひける」。*浮世草子(うきくさこ)「好色(こうしき)五人(ごにん)四(よ)・三(さん)田(でん)を(を)すく馬(うま)の口(くち)を取(と)る」。

②江戸(えど)時代(じだい)、人(ひと)や貨物(かぶつ)の輸送(しゆそう)に當(あた)る馬(うま)について徴取(てうきよ)する税(ぜい)。駒の口(こまのくち)。*不亡抄(ふむしょう)三(さん)・稅法(ぜいぽう)之(し)事(こと)「稅取(ぜいきよ)の法(ぽう)またありや略(りやく)取(と)る馬(うま)の口(くち)といふ、船(ふね)に取(と)る船役(ふねやく)といふなり」。

(うまぎ)があること(こと)から) 武家(ぶけ)の玄関(げんかん)。*雑俳(ざつはい)・柳多留(りゅうたろう)一(いち)七(しち)「おど(おど)り子(こ)のた(た)んではいる馬(うま)の口(くち)」。

ウ(ウ)マノ口輪(くちりん) (くちりん) 「う(う)ま(馬(うま))の口(くち)ち」①に同(どう)じ。*新撰字鏡(しんせんじきやう)・銜馬(げんば)乃(な)口和(くわ) (因園(いんえん)字鏡(じきやう))

うまの(畜(くち)) 馬(うま)の足(あし)にはか(か)せるわ(わ)らぐと(と)。う(う)まのわ(わ)らぐ。う(う)まぐつ。*小笠原(せがはら)入道(にゅうだう)宗賢(むねけん)記(き)馬(うま)のくつをばう(う)つといふなり。またか(か)け候(こう)とも申(まを)候(こう)なり」。

*飯名草子(はんなぐさこ)仁勢物語(にせいものがたり)下(した)六(む)三(さん)「乞食(きじき)ありき下(した)り、道々(みちぢやう)むまのくつ拾(ひろ)ひ履(は)きど(ど)するを、あ(あ)はれが(が)りけり」。*雑俳(ざつはい)・神子(かみこ)の膳(ぜん)「曲輪(まがわ)のは福(ふく)じやひ(ひ)らやれ馬(うま)の畜(くち)」。

うまの(鞍(くら)) 馬(うま)の背(せ)に置(お)いて人(ひと)や荷物(にもの)を載(の)せる道具(どうぐ)。*新撰字鏡(しんせんじきやう)・鞍(くら)破(や)也(なり)馬(うま)乃(な)久良(くら)也(なり)。*観智院(くわんちゐん)本(ほん)名義抄(なぎがき)抄「鞍(くら)クラクラホネムマノクラシタク

情の変わらないうちに早く手に入れた方がよいというところ。『浮世草子』宛久二世「銀にならざる徒の浮世。今時はうまい物は皆ヨシ」といふ事口近し。『歌舞伎・韓人漢文手管始(唐人殺し)』「うまい物は皆に喰へば。先づ足元に有金から」。『諺苑(美・マイ)』ものは皆ヨシに「くへ」うまき水(みづ)「よい水。物を生かせるよ。水。あまきみず。令義解・神祇・孟夏・大忌祭・調・広瀬龍田二祭也。欲令山谷水變成甘水。浸・潤瀨・大忌祭・出雲板瀬」如此く奉らば皇神等の敷き坐す山山の口よりうまき水なりと下し賜ふ水を甘水(ウマキミツ)と受(う)けて

ウマイアチよう・テウ(朝)ウマイヤチよう(朝)うまいい・い・味飯(名)味のよい飯。うまい飯。『万葉』六三八「〇味飯(うまいひ)を水に饌(か)み成し吾が待ちしかははさね無直(ただ)にしあらねば作者未詳」

うまいかた【馬筏(名)】①流れの急な大河などを騎馬で渡るときに馬を並べてつなぎ、川を渡る方法。強い馬を上流に、弱い馬を下流に配置する。馬の筏。『山槐記』治承四年五月二日「伴類十餘騎作時、打入馬於河内・橋上より歩渡瀬、或又難・深瀬、以馬筏郎等二百餘騎渡河・宇治拾遺一五二「そこひもしらぬ瀬にたふありけり。馬筏をつくりて泳がせけるに、かち人はそれにとりつきて渡りけるなるべし」『太平記』八三「三月二日合戦事・佐用(さよ)上月かつきの兵(へ)はもの三千余騎、一度に颯(さ)と打入り、馬筏(ウマイカダ)に流をせきあげたれば」

②馬を運ぶためのいかだ。『関西ウマイカダ』今更江戸●〇〇〇〇余之団

うまいさ【馬軍(名)】①馬に乗った兵士。騎馬の兵。騎兵。むまいさ。うまいさうまつわもの。②徒歩軍(かちいくさ)。『書紀』仁德五年五月(前田本訓)是田道精(す)ぐれる騎(ウマイカサ)を連れて其の左の道のり(か)を撃つ。『書紀』雄略八年二月(國書寮本訓)乃ち奇兵(か)くられたるつはもの(を)を疑はなち(い)して、歩(か)ちいくさ騎(ウマイカサ)を攻めて大に破りつ。③騎兵による戦い。騎馬戦。④徒歩軍(かちいくさ)。『関西ウマイカサ』今更江戸●〇〇〇〇余之団

うまいし【馬医(名)】「うまいし(馬医)①に同じ。『俳諧古今俳諧明題集』秋「馬医の直して通る案山子哉左衛門」『関西ウマイシ』今更江戸●〇〇〇〇余之団

うまいし【馬出(名)】「うまいし(馬出)に同じ。『馬出』は馬を主として産馬地・役畜用の馬を一定期間売買する市。主として産馬地・役畜用の馬を、江町時代の各都府で開張し、馬出(はくろ)や、馬町などの地名をとめている。馬の市。大東院寺社雑事記「文明七年七月五日・元興寺南大門前馬市立初之、古市之所行也」・東海通名所図会「三池鯉鮒馬市、毎年四月廿五日より始めて五月五日に終る」・おもひ草・佐佐木信綱「馬市にき馬かひてかへるさの野路おもしろき鈴虫の声」『関西ウマイチ』今更江戸●〇〇〇〇余之団

うまいな【名】『関西植物』①たかな(高菜)。三重県京都府の各一部。②ふだん草(不斬草)。三重県・滋賀県・大阪府・京都府・奈良県の各一部。③二人女房・尾崎紅葉上五「新八心持好さうに熟睡(うまい)して、折々顔に來る蚊を現(うつ)つて撲(たた)き」・義血俠血・泉鏡花「九「取者は夢にも知らず熟睡(ウマキセリ)」

うまいのそし【うまいのそし(馬医草子)】絵巻物。一巻。作者不詳。文永二二(一六四一)七五ごろの作。伯馬以下八人の馬医(な)の肖像画にそれぞれ馬の絵を配し、呪文(じま)じまや馬医(な)の馬(う)を書き、巻末に一七種の薬草を写生した。馬医の秘伝書とみられる。『関西ウマイノソシ』今更江戸●〇〇〇〇余之団

うまいのそし【馬医草子(名)】露店の飲食店。雑俳・苦翁評万句合「宝曆一三」うまいの屋にはまる小でつち。『黄表紙』孔子時監樂中「あの係介が、下馬へ出るうまいのやでござるから」『関西祭や縁日』に玩具や駄菓子(うまい)を売る露店商。富山県礪波地方(関西ウマイモノヤ)今更江戸●〇〇〇〇余之団

ウマイヤチよう・テウ(朝)ウマイヤチ(ウマイヤ)イスラム王朝の一つ。前ウマイヤ朝(六六〇)一七五〇)と後ウマイヤ朝(七五〇)一〇三三)がある。オマヤ朝。ウマイヤ朝。『前ウマイヤ朝』ウマイヤ家出身のムアウィヤが Damas 城を都として開いた。七五〇年一四代(のとき)アッバース家に滅ぼされた。『後ウマイヤ朝』ウマイヤ朝の滅亡後、その一族アブドゥルラフマン一世が七五六年コルドバを首都として再興し、イビリア半島に威をふるった。『一〇三一年滅亡』。『関西ウマイヤチ』今更江戸●〇〇〇〇余之団

ウマイヤモスク(Umayyad mosque)シリアの Damas 城にあるイスラム大寺院。七五〇一七五一年に建設。ビザンチン時代のキリスト教会を改造したもの。初期イスラム建築の精華。『関西ウマイヤモスク』今更江戸●〇〇〇〇余之団

うまいり【馬入(名)】大將が城中にはいること。『甲陽軍鑑』品二〇「いづれもすぐれ大雪にて、冬よりも結句(うまいり)なり。それゆへ敵は見えず早々御馬入(うまいり)し」『関西ウマイリ』今更江戸●〇〇〇〇余之団

うまいり【馬入(名)】『関西耕作地などの小路。群馬県勢多郡横野町・東京都多摩郡横野町・神奈川県愛甲郡横野町・長野県横野町(名未詳)』

うまいり【馬入(名)】『関西耕作地などの小路。群馬県勢多郡横野町・東京都多摩郡横野町・神奈川県愛甲郡横野町・長野県横野町(名未詳)』

うまいり【馬入(名)】『関西耕作地などの小路。群馬県勢多郡横野町・東京都多摩郡横野町・神奈川県愛甲郡横野町・長野県横野町(名未詳)』

うまいり【馬入(名)】『関西耕作地などの小路。群馬県勢多郡横野町・東京都多摩郡横野町・神奈川県愛甲郡横野町・長野県横野町(名未詳)』

うまいり【馬入(名)】『関西耕作地などの小路。群馬県勢多郡横野町・東京都多摩郡横野町・神奈川県愛甲郡横野町・長野県横野町(名未詳)』

うまいり【馬入(名)】『関西耕作地などの小路。群馬県勢多郡横野町・東京都多摩郡横野町・神奈川県愛甲郡横野町・長野県横野町(名未詳)』

うまいり【馬入(名)】『関西耕作地などの小路。群馬県勢多郡横野町・東京都多摩郡横野町・神奈川県愛甲郡横野町・長野県横野町(名未詳)』